

水干鞍伝統技法研究

—馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」模作を通して—

平成27年度

東京藝術大学大学院美術研究科
博士後期課程学位論文

文化財保存学専攻
保存修復研究領域（工芸）

1312937

葉翠馨

内容

序論	2
第一章 日本の馬具.....	5
第1節 日本の馬具に関する研究史.....	5
第2節 日本の武具・馬具について.....	9
第二章 大和鞍の概要.....	13
第1節 アジアの木製鞍について.....	13
第2節 乗馬風習と大和鞍の起源.....	18
第3節 大和鞍の流れ.....	22
第三章 水干鞍の出現.....	26
第1節 軍陣鞍と水干鞍の変遷.....	26
第2節 水干鞍と軍陣鞍の差異.....	28
第3節 水干鞍の装飾について.....	30
第四章 東京藝術大学大学院所蔵「大和鞍」の修復.....	34
はじめに.....	34
第1節 修復概要.....	34
第3節 まとめ.....	41
第五章 馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」の模造.....	42
第1節 「烏彫木漆塗鞍」概要.....	42
第2節 復元制作工程.....	45
結論.....	57

序論

日本の漆工品といえば、一般的に仏教用具、家具、建具、調度品などの指し物や椀・盆・皿類などの挽き物がよく見られ、指し物、挽き物以外にも造形的に興味深いものが多数ある。現存している歴史文献や各研究資料を検討し、その中でも特に大和鞍に注目しているが、その用途や構造により大きな差異がある。小島摩文の「馬具の種類と名称について—データベース化のための標準名を考える—」（2015年）においては、

「人が馬に乗り座るための道具を「鞍」と呼ぶ。また、荷物を載せたり、馬車や犁などを引くために馬の背に固定される道具も「鞍」と呼ばれている。¹」とある。本研究にいう鞍は人が馬に乗り座るための道具である。大和鞍は、前輪・後輪と左右居木の4枚の木を組んでいって、馬の体と人間の体に合わせるために、形は直線ではなく、優雅な曲線造形の組み合わせが、魅力的であることには異論がない。この構造は、西洋鞍には見られない特殊な形をしている。その洗練された曲線の造形にはこの国に独特の美学が感じられる。桃山時代から江戸時代までに日本鞍は文化的成熟を迎え、もちろん鞍素地のみでも充分研究に値するが、その時代の鞍師たちの熟練の加飾表現や日本の独創の意匠を通して、江戸時代の流行と美意識に反映されていることはさらに深い興味を呼び起こされる。本研究では、室町・桃山時代から江戸時代までによく作られている鞍の形式である水干鞍を中心に、他には見られない独特な作風とデザインを持つ優れた作品である馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」（江戸時代）の再現制作を通して、水干鞍の制作工程と鞍橋の結びの伝統技法を論究対象としたい。近世の水干鞍の制作技法と鞍の緒の縛り方は日本固有の構造、鞍打、漆、加飾、意匠などに目を向けたとき、水干鞍の制作技法と鞍橋の結びの伝統制作工程についての論究はこれまであまり行われてこなかったが、それだけに、馬具の歴史、鞍の歴史をたどる上で、またその修復に関しては漆工史の分野において非常に価値のあるものとなるに違いない。

日本の馬具に関する研究の始まりを振り返ると、江戸時代頃に馬具研究ブームを迎えた。当時の有職故実家である稲葉通邦の『鞍木鐙類聚』²延享元(1744)年と栗原信充の『鞍鐙新書』³寛政六(1794)年と松平定信の『集古十種』⁴寛政十二(1800)年などが残した史料がもっとも知られている。その後、日本最初の古墳発掘調査では、明治十九(1886)年帝国大学大学院の人類学家-坪井正五郎による足利公園古墳の発掘調査がある。それがきっかけで、古代史・考古学ブームを巻き起こり、日本列島各

¹ 小島摩文、『馬具の種類と名称について—データベース化のための標準名を考える—』、神奈川県国際常民文化研究機構年報 第5号、p57-p81、2015年、p60

² 稲葉通邦(1744-1801)、『鞍木鐙類聚』、国立国会図書館写、2011年

³ 栗原信充(1794-1870)、『鞍鐙新書』、巻1-5、根岸信輔氏寄贈、冑山文庫、国立国会図書館写、2011年

⁴ 松平定信(1758-1829)、『集古十種 4巻 馬具之部』、国書刊行会、全4巻、1908年

地の古墳の発掘調査が始り、発掘調査が増加するとともに、古墳の出土品の研究や馬具の青銅製装飾品や埴輪馬などが中心となった。20世紀に入ると、その代表的研究には小松大秀の『和鞍の形成に関する一試論』⁵(1976年)、小松大秀の『菊螺鈿鞍について』⁶(1979年)；藤本鞍齋の『日本の鞍』(1999年)、武部敏夫の『歴史手帖 新井白石と正倉院の馬鞍』⁷(1999年)、大沼宜規の『今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から故実家栗原信充の研究資料(武具・馬具)--『古今要覧稿』の材料を中心に』⁸(2008年)、竹内奈美子の『葦穂蒔繪鞍鐙』⁹(2010年)などの古墳時代の遺跡から出土した馬具の研究が挙げられる。また、木製鞍や中世の鞍の夜光貝を用いた螺鈿鞍に対する様々な論議が主流となり、日本鞍全体の流れや鞍の装飾芸術について論じられてきた。このようにさまざまな日本鞍の研究のなかでは、水干鞍の製作技法と鞍橋の結索法に関する包括的な研究はこれまでほとんどなされてこなかった。ことに注目し、水干鞍の重要性について今回の研究対象とすることとした。

現在までに伝世する水干鞍は、素地構造、意匠、加飾技術が朝鮮を含む他のアジア諸国の鞍とは大きく異なり、日本でしか見られない独特な形を示すようである。それはアジア大陸の影響を受け入れ、中世に至って日本独自の水干鞍の様式が発達したためである。そこで本研究では日本鞍の形式だけではなく、大和鞍の源流としてアジア大陸との関連性を探り、日本鞍の初期から全盛期までの発展過程や水干鞍を出現との影響を考察する。さらに水干鞍の伝統技法と鞍橋の結び方を考察し、その構成する各素材と製作技法の特徴を分析し、復元した結果を今後の馬具研究史に新しい視点を提供することで、これからの馬具研究史の中で新しい視点として加えることができたらと願う。

現在論究されているところの鞍の形式、用途や鞍の寸法と拓本や作者の判鑑、花押があることに基づいた学説は江戸時代を中心に出され、それ以前の古墳時代の馬具、藤ノ木古墳出土の金銅鞍金具、正倉院所蔵している馬具、中世以降の螺鈿鞍や近世の蒔繪鞍および日本鞍の流れなどについては充分研究もなされてきたが、これまでの筆者の調査によれば、水干鞍の制作技術と鞍橋の結びの工程に関する研究については充分とはいえず、現在鞍に対して文化財の保存修復は系統的かつ包括的な方法の定着がみられるとは言い難いことである。

⁵ 小松大秀、『和鞍の形成に関する一試論(日本の武器武具<特集>-3-)』、東京国立博物館研究誌(308)、東京：東京国立博物館、p4-p22、1976年

⁶ 小松大秀、『中世螺鈿鞍の美(特集 馬とはどのような生き物か?：馬と人の出会いから未来へ)』、生き物文化誌：人と自然の新しい物語、p21 p48-p55、東京：生き物文化誌学会、2014年

⁷ 武部敏夫、『歴史手帖 新井白石と正倉院の馬鞍』、日本歴史(617)、東京：吉川弘文館、p34-p36、1999年

⁸ 大沼宜規、『今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から故実家栗原信充の研究資料(武具・馬具)--『古今要覧稿』の材料を中心に』、国立国会図書館月報(572)、東京：国立国会図書館、p2-p3、2008年

⁹ 竹内奈美子、『葦穂蒔繪鞍鐙』、國華 116(1)、東京：國華社、p30-p34、2010年

日本の現状では、鞍師という職人が明治以降途絶えたと考えられ、江戸時代の水干鞍の製作技法も伝承されているとは言いがたい。また、現存する鞍は、何度も清掃や解体修理を経ているため、本来の結びの資料も僅少である。現存する鞍作品の調査を通じて、古い文献に記載されている鞍の型紙、拓本、結び図などの資料を検証し、さらに水干鞍について素地の制作から組立方法や緒の結びの工程と手順を実際に制作して示し、理論的且つ実証的に鞍の技法を解明する。今回は江戸時代の水干鞍に関する伝統技法を考察し、その構成する各素材と製作技法の特徴を分析しながら、現存する作品の研究調査及び史料調査に照合し、可能な限り当時使用されていたと推測されるものについては現時点に再現可能な素材を用い、水干鞍を再現制作する。

第一章 日本の馬具

第1節 日本の馬具に関する研究史

現在までの調査によれば日本において馬具が研究されたものとしては武家、あるいは有職故実の研究者が編纂したり、残された文献が記載されたものが中心となる。江戸時代以降、有職故実の研究についてはかなり盛んなものとなり、民間でも有職故実の研究をする者が次々に現れ、独自の研究がみられた。その中には多くの武器や馬具に関して考察が散見される。現在でも武器・馬具について有職故実の研究には多くの貴重な文献が残されているが、それらは本研究の水干鞍の伝統技法研究にとって大変な重要な資料となっている。その中で一般的に知られている著作を以下に説明する。

- ①延享元(1744)年に刊行された稲葉通邦の『鞍木鐙類聚』¹⁰。当時の鞍と鐙を記録したもので、鞍鐙の各部位の拓本、銘、花押、鞍鐙の寸法などについてかなり詳細な記録を豊富に用いた史料となっている。(図1)。
- ②伊勢貞丈の『鞍鐙工記』¹¹は宝暦13(1763)年に著わされ、伊勢貞継が大坪道禪の鞍の作り方(大坪鞍)について奥義を伝授を受けて、伊勢家に伝えたという伊勢鞍(作鞍)の由来、鞍鐙名處、鞍鐙の寸法、伊勢家に関する鞍作者の判鑑(図2)などの様々な資料や詳しい挿図を添えて、詳しく解説している。
- ③寛政12(1800)年に松平定信が柴野栗山・広瀬蒙斎らの学者や家臣の谷文晁等に命じて、約1859点の碑銘、鐘銘、兵器、銅器、楽器、文房、印璽、扁額、肖像、書画などの文物の木版図録集である『集古十種』¹²。兵器類中の一つである馬具の部に鞍、居木(図3)、鐙、面懸、手綱、轡など馬具の全般の寸法、所蔵地、特徴などを記し、挿図も示した。



図1 鞍木鐙類聚



図2 鞍鐙工記



図3 集古十種馬具之部

¹⁰ 同註2

¹¹ 伊勢貞丈、『弓馬之書 26 伊勢鞍鐙工記』、国立国会図書館、1763年

¹² 同註4

④『止戈枢要』¹³文政5(1822)年に大関増業が編述した兵学兵技等の書である。内容は武芸・兵法技術の教本などに留まらず、測量・医学・機織・組紐・染色・茶事等各の分野に及び、武事・武具産業その他に関わる参考書として活用されている。これらの中で、特に馬具・武具類についての製作技法の工具と工程(図4)が詳述されている。

⑤屋代弘賢の『古今要覧稿 第2冊第百四十四卷』¹⁴(図5)は文政四年(1821)から天保十三年(1842)完成した江戸時代後期の類書である。国書刊行会の刊本では、神祇・姓氏・時令・地理・暦占・歳時・器財・冠服・装束・政事・雑芸・草木・人事・病痾・禽獸・虫介・魚介・飲食・菜蔬・雑部を分類し、その諸事項の起源・歴史などを古今の文献をあげて述べられている資料である。



図4
(図：止戈枢要)



図5
(図：古今要覧稿)

江戸時代の武具・馬具に関する有職故実の研究家は数が多く、鞍の形式、用途や鞍の寸法と拓本や作者の判鑑、花押などを中心に研究されている。栗原信充の『鞍鑑新書』¹⁵寛政六(1794)、作者不明の『大坪本流馬道秘書(4)大坪本流鞍寸之巻』¹⁶(1800年)、狩谷椽斎自筆訂本である『箋注倭名類聚抄第5巻76 鞍馬具』¹⁷(1931年)、大沢繁豊の『鞍鑑目利書』¹⁸(年代不明)、中島正蔵の『鞍作者判鑑』¹⁹(年代不

¹³ 大関増業編著、下鳥正憲校訂、『止戈枢要-續録34』、書物展望社、1946年

¹⁴ 屋代弘賢(1758-1841)、『古今要覧稿第2冊』、国書刊行会、全6巻、1907年

¹⁵ 同註3

¹⁶ 『大坪本流馬道秘書(4)大坪本流鞍寸之巻』、江戸後期、国立国会図書館写、2011年

¹⁷ 狩谷椽斎(1775-1835)、『箋注倭名類聚抄第5巻76 鞍馬具』、曙社出版部、1931年

¹⁸ 大沢繁豊(江戸時代)、『鞍鑑目利書(元禄四梅津伝右衛門へ伝授奥書)』、1冊、国立国会図書館写、2011年

¹⁹ 中島正蔵(江戸時代)、『鞍作者判鑑』、1冊、写、国会図書館：古典籍資料室所蔵

明)などがその代表的な例である。ほかにも作者と年代不明な和書：『鞍鐙神作之傳』²⁰などがある。

岡安光彦の『いわゆる「素環の轡」について-環状鏡板付轡の型式学的分析と編年』²¹の論文中に

「日本における科学としての考古学は明治時代に入って開始され、その第一歩となったのがモースによる大森貝塚の発掘（1877）であったことはよくいわれるところであるが、日本の考古学の初期において実際にこれを主導し推進したのは、東京人類学会をその中心となって興した（1886）坪井正五郎であった。古墳時代の研究も坪井を中心に開始され、1886年には日本で最初の古墳の発掘調査が栃木県足利公園で行われたが、その遺物の中に多くの馬具が含まれていたことにより、馬具研究もここに出発した。」と詳細に述べられているが、1980年代までに日本の馬具に関する研究史は、は古墳の研究や馬具の青銅製装飾品や埴輪馬などが中心となった。これらを探究するのは、本論文の意図するところではないので、簡単なる紹介にとどめておく。

これまで（1980年以降）馬具についての疑問を明らかにするために多くの研究がなされ、馬具の研究、様々な分野は論点が浮かび上がっている。考古学の分野においては、古墳時代出土している馬具および金銅鞍金具がほとんどであると言ってもよい。また、歴史・文化的な分野では、正倉院所蔵の馬具に関する研究も多くみられる。漆工芸分野においては、鎌倉時代には、日本の螺鈿の技術が詰め込まれた優品がよく見られた時期であり、様々な螺鈿鞍の意匠がよく研究されている。それを本論の参考として、以下に列記する。

古墳時代の遺跡から出土した馬具についての復元研究や調査報告は以下のとおりである。

- ①神谷正弘の「大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復元」²²(1987年)。
- ②宮代栄一の「古墳時代における馬具の暦年代--埼玉稲荷山古墳出土例を中心に」²³(1996年)。
- ③福島県文化財センター白河館研究紀要に記載している『いわき市中田横穴出土馬

²⁰ 『神作鞍鐙傳』、明暦元(1655)年

²¹ 岡安光彦、『いわゆる素環の轡について-環状鏡板付轡の型式学的分析と編年』、日本古代文化研究第2号、1985年

²² 神谷正弘、『大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復元』、考古学雑誌 72(3)、p379-p392、1987年

²³ 宮代栄一、『古墳時代における馬具の暦年代--埼玉稲荷山古墳出土例を中心に』、九州考古学 (71)、p1-p33、1996年

具の復元製作の概要』²⁴(2013年)。

- ④菅谷文則、川崎志乃、東影悠[他]の『三重県津市高茶屋大塚古墳出土馬具の研究』²⁵(2013年)などである。

奈良県生駒郡斑鳩町にある藤ノ木古墳(6世紀後半)から出土した金銅製馬具を中心について研究は、

- ①「芸術新潮」発表した『ますます面白くなった斑鳩の里-藤ノ木古墳出土の鞍金具をめぐって(アート・ニュース)』²⁶(1986年)。
②沢田正昭の『考古藤ノ木古墳金銅製馬具(奈良)(最近の文化財修理<特集>)』²⁷(1991年)。
③鈴木勉の『斑鳩・藤ノ木古墳出土鞍金具の金工技術と技術移転』²⁸(1997年)。
④勝部明生の『藤ノ木古墳鞍金具文様の考察--亀甲繋ぎ文(藤ノ木古墳出土刀剣の復元研究)』²⁹(1989年)などである。

正倉院に収蔵している馬具である鞍橋、鐙、韉、屨脊、鞍褥などの部品の研究は、

- ①小野山節の『正倉院宝物馬具の性格(正倉院<特集>)』³⁰(1992)。
②武部敏夫の『歴史手帖 新井白石と正倉院の馬鞍』³¹(1999)。
③西川明彦の『武器・武具(日本のこころ(143)正倉院の世界)--(正倉院宝物の魅力)』³²(2006)。

²⁴ NPO工芸文化研究所、『いわき市中田横穴出土馬具の復元製作の概要』、福島県文化財センター白河館研究紀要、p61-p72、2012年

²⁵ 菅谷文則、川崎志乃、東影悠[他]、『三重県津市高茶屋大塚古墳出土馬具の研究』、考古學論攷：橿原考古学研究所紀要 36、p55-p75、2013年

²⁶ 「ますます面白くなった斑鳩の里-藤ノ木古墳出土の鞍金具をめぐって(アート・ニュース)」、東京：新潮社 37(3)、p78-p82、1986年

²⁷ 沢田正昭、『考古藤ノ木古墳金銅製馬具(奈良)』、仏教芸術 / 仏教芸術学会 編、東京：毎日新聞社、p4-p5 p52-p61、1991年

²⁸ 鈴木勉、『斑鳩・藤ノ木古墳出土鞍金具の金工技術と技術移転』、考古學論攷：橿原考古学研究所紀要、橿原：奈良県立橿原考古学研究所、p1-p33、1997年

²⁹ 勝部明生、『藤ノ木古墳鞍金具文様の考察--亀甲繋ぎ文(藤ノ木古墳出土刀剣の復元研究)』、研究紀要 / 由良大和古代文化研究協会、橿原：由良大和古代文化研究協会、p50-p58、1989年

³⁰ 小野山節、『正倉院宝物馬具の性格(正倉院<特集>)』、仏教芸術(200)、東京：毎日新聞社、p67-p75、1992年

³¹ 武部敏夫、『歴史手帖 新井白石と正倉院の馬鞍』、日本歴史(617)、東京：吉川弘文館、p34-p36、1999年

³² 西川明彦、『武器・武具(日本のこころ(143)正倉院の世界)--(正倉院宝物の魅力)』、別冊太陽(143)、東京：平凡社、p130-p133、2006年

④永瀬 康博の『正倉院の鞍褥と熏』³³(2007)などである。

中世以降の螺鈿鞍に関する研究：

- ①小松大秀の『中世螺鈿鞍の美 (特集 馬とはどのような生き物か? : 馬と人の出会いから未来へ)』³⁴(2014年)。
- ②小松大秀の『菊螺鈿鞍について』³⁵(1979年)。
- ③菅野茂雄の『御嶽神社蔵 国宝円文螺鈿鞍付属、厚総三懸の調査報告』³⁶(2015年)などである。

その他の日本鞍について研究：

- ①小松大秀の『和鞍の形成に関する一試論 (日本の武器武具<特集>-3-)』³⁷(1976年)。
- ②藤本鞍斎の『日本の鞍』(1999年)。
- ③大沼宜規の『今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から 故実家栗原信充の研究資料 (武具・馬具)--『古今要覧稿』の材料を中心に』³⁸(2008年)。
- ④竹内奈美子の『葦穂蒔繪鞍鐙』³⁹(2010年)などである。

第2節.日本の武具・馬具について

利器（刀剣）・武具（甲冑）・馬具などがある。利器（刀剣）は攻撃能力を有する道具であり、もちろん敵に殺傷、破壊の目的として使われるが、相手を威圧し、自身を防御する道具でも用いられる。武具（甲冑）は基本的に戦闘する際に使用している道具の総称であり、元々戦闘用に作られたものを指し、実際には自身を守るための装備を扱われることが多い。馬具は騎乗のときに騎手の安定、馬の制御および装飾の道具であり、鞍・鐙・轡・手綱・腹帯・鞞しおでなどにより構成される。

³³ 永瀬康博、『正倉院の鞍褥と熏』、御影史学論集 (32)、p63-p78、神戸：御影史学研究会、2007年

³⁴ 同註 5

³⁵ 小松大秀、『菊螺鈿鞍について』、東京国立博物館研究誌 (345)、東京：東京国立博物館、p18-p27、1979年

³⁶ 菅野茂雄、『御嶽神社蔵 国宝円文螺鈿鞍付属、厚総三懸の調査報告』、甲冑武具研究 (189)、東京：日本甲冑武具研究保存会、p5-p9、2015年

³⁷ 同註 4

³⁸ 同註 7

³⁹ 同註 8

村井崑雄の『日本の武器武具概説』⁴⁰においては

「武器は攻撃用の利器であり、武具は防禦用具として分けることができる。しかし防禦用具をも含めて、広い意味で武器と総称されている。また、5世紀頃から7世紀頃までに、日本では大陸から騎馬文化の影響を受けて来、馬は近代まで戦争に大きな役割を始めていたことが認められる。古墳時代から出土する各種馬具には、金色燦然たるとした豪華な鞍金具があり、当時豪族の威容を示すためのものだと解されている。ほかには、馬用の甲冑もあり、騎馬戦時代に入ってきて、甲冑の形態に変革を与えるなどを見ると、馬具と武具とは密接な関係にあった。」と述べられている。日本に伝わった鞍は、古墳時代からアジア大陸などの大陸文化に影響を受け、それが日本固有のものとして発達し、平安初期までに実用性よりも神社仏閣への献上品として用いられてきたと推測しうる。平安時代後期から日本古来の思想を受け継ぎ、独自の美意識に徹し、固有の鞍の形式を確立した。西洋の革鞍とは違って、木製漆塗り鞍中心で、特殊な構造を有し、金属製の鐙などさまざまな伝統技術を生かして作られてきた。馬具の構造や素材、元々国の自身の文化、気候、環境などとの深い関連性が見られる。特に戦いの形式における変化によりそれらは馬具においてもその変化は明らかで、大和鞍の形式は画期的な変革になっている。ここでその代表例として挙げるのは鞍の出現である。紀元前2000年から紀元前1000年紀初の間には、馬の背に薄い敷物は現れ、おそらく鞍の前身であり、時間の流れによると、馬具の形式も変わってきた。木製鞍を出現後、人間は馬を制御するのが容易になり、徒歩での戦闘から騎馬による戦闘の時代へと進んでいく。

日本の伝統的作法については、儀賀美智子の『古くから伝わる日本の作法』⁴¹に、「日本の作法の経路と根幹は、もともと皇宮の宮中礼法から始まったのである。平安時代、公卿の間で儀式や祭り事（典礼）などの際、法令、宮職などを研究学問であった。「有職故実」が重んぜられ、礼儀作法の流儀の家柄が自然に生じたのである。」とある。馬具は日本に伝わったから、朝廷として大切なものである。そのため、馬具は研究学問となり、特に鞍の礼儀作法が定められた。馬具研究する場合はこれらの史料を駆使する必要がある。以下に代表的な文献を紹介する。

明暦三（1657）年頃に徳川光圀により編纂が始まり、明治三十九（1906）年に完成した『大日本史』⁴²は漢文体による歴史書である。その中には、日本上世から江戸時代までの各時代の史書、有職故実に記載した日本鞍の始末及び各時代の馬具の形式、礼儀作法、流儀、禁止令など関する部分を収録し、この『大日本史』の礼楽志に詳細に記載されている。各時代の鞍事情については次のように一部抜粋する。

⁴⁰ 東京国立博物館、『日本の武器武具概説』、特別展－日本の武具武器の図録、大塚芸社、p364、1977年

⁴¹ 儀賀美智子、『古くから伝わる日本の作法』、鈴鹿国際大学紀要 1、p 135- p 145、鈴鹿国際大学、2012年

⁴² 徳川光圀 編、徳川綱 校、徳川治保 重校、『大日本史 礼楽志8-9』、全15巻、吉川弘文館、1911年

「鞍具之制、上世⁴³大己貴命行裝有鞍鐙」と記載している。

訳：「鞍の形式は上古時代大己貴命（別称：大国主命）の旅の装束に鞍と鐙がある。」上古時代日本は馬具をすでに出現したと記述されているが、上古時代の史実として確認し難しいということは認めざるを得ない。

『古事記』には

「鞍具始見於此、元明帝靈龜元年、詔禁文武百寮六位已下、用虎豹羆皮金銀飾鞍具」と記される。

訳：「馬具最初に関する記載では「古事記」である。靈龜元(715)年元正天皇の命令により、位階が従六位以下の官僚は、馬具の飾りでは虎、豹、熊皮や金銀など素材を禁止した。」

『続日本紀⁴⁴』には

「桓武帝延暦十一年、禁鞍橋用桑棗、其舊所有者、申所司燒印用之、」と記載される。

訳：「延暦十一年（792年）桓武天皇は桑や棗の木で作られた鞍橋の利用を禁止した。但し、すでにあった鞍橋は焼き印を押され管理した。」

『日本後記』⁴⁵、『類聚三代格』⁴⁶、『政事要略』⁴⁷三冊共に

「平城帝大同二年、禁素木鞍橋、及鞍具用獨射犴⁴⁸、羴鹿⁴⁹、獬⁵⁰、羆等皮、嵯峨帝弘仁元年、公卿奏、毛皮之類、不聽犯用、鞍具之要、唯須皺文、是以無賴之徒、

⁴³ 上世とは、上代。上古。日本の歴史上の、特に文学史・国語史における時代区分の一。主として、奈良時代にあたる。出典：松村明、『大辞林 第三版』、株式会社三省堂、2006年

⁴⁴ 『続日本紀』、桓武天皇の命により平安時代初期に菅野真道らが編纂された勅撰史書。

⁴⁵ 藤原緒嗣ら、『日本後記』、史書、全40巻（現存10巻）、承和7年（840年）

⁴⁶ 『類聚三代格』、作者は不明であるが、約平安中期に編纂された弘仁、貞観、延喜の三代の格を神社、調庸事、禁制事などの法令集。全30巻。現存は完本はない。

⁴⁷ 惟宗允亮、『政事要略』、有職故実書、全130巻、現存25巻、平安時代（1002年）

⁴⁸ ①「犴」とは、肉食目の哺乳類である。北方系の犬、嘴が黒い、家の見張りがいい。出典：教育部重編国語辞典編輯委員会、『重編国語辞典』、台北：台湾商務印書館股份有限公司、六冊、1981年、p2233

②「独犴」については北方犬種説、ラッコ説、アザラシ説などがあり、いまだ議論がたえない。」とある。出典：高瀬克範、「皮革利用史の研究動向—皮革資源への「複眼的」接近のために—」、『日本古代学』1、p81-p106、2009年、p82

⁴⁹ 「羴鹿」とは、「海驢」とも書く、肉食目の海生哺乳類である。別名：「海獺」がある。

⁵⁰ 「獬」とは、①獣名、狸と似ている。②鼯鼠とも言われる。異体字は「𪛗」である。

出典：教育部異體字字典編輯委員會編、「異體字字典」、中華民国教育部、C07295
ホームページ：<http://dict.variants.moe.edu.tw/main.htm>

竊斃牛馬、其弊不少、伏望聽用毛皮、其鞍橋除桑棗之外、不論素漆、民庶通用、竝許之。」

訳：「大同二（807）年平城天皇の詔で、素木造り鞍および馬具では独犴、海驢、鼯鼠^{むささび}、熊等の皮の使用をすべて禁止した。弘仁元（810）年嵯峨天皇時代に馬具の部品には牛や馬の皺革を使用のみである。無頼の徒が牛馬を殺すことがよく行ったが、毛皮等を使用できるように、お願いしたい。鞍橋は桑の木や棗の木以外であるなら、鞍は素木造りや漆塗りでも庶民が通用であることを望む」

『西三條裝束鈔』⁵¹には

「……、三位以上成唐鞍、五位以上用倭鞍、…（中略）…、飾鈔、西三條裝束鈔、行幸、五位已上通乘倭鞍、近衛次將乘移鞍、…（中略）……」と記される。

訳：「官職の位階により、三位以上唐鞍を乗用、五位以上倭鞍を乗用、……」

『飾鈔』、『西三條裝束鈔』共には

「行幸、五位已上通乘倭鞍、近衛次將乘移鞍、……」と記載される。

訳：「天皇が外出する際に、官職は五位以上であり倭鞍を乗用、近衛次將であり移鞍を乗用する。」

『桃華藥葉』⁵²、『西三條裝束鈔』の二冊には

「其螺鈿鞍、公卿用有筋螺鈿、四位五位無筋、五位已上端螺鈿沃懸塵、六位端螺鈿黒漆」と書かれる。

訳：「螺鈿鞍の作法、公家は有筋螺鈿を使用する、位階の四位と五位は無筋螺鈿を使用する、五位以上は端螺鈿沃懸塵を使用する、六位は端螺鈿黒漆を使用する」と明記した。

⁵¹ 三条西実隆、『西三條裝束鈔』、有職故実書、写、室町時代中期（15世紀後半）

⁵² 一条兼良（1402-1481）、『桃華藥葉』、有職故実書、写室町時代後期（1480年）

第二章 大和鞍の概要

第1節 アジアの木製鞍について

1、アジア大陸の木製鞍

アジア大陸の鞍は西洋の革鞍に対して木製鞍が多くみられるという傾向がある。しかし、同じ木製鞍でも鞍の構造と形式には、気候環境、文化歴史及び当時の技術、鞍の用途・意匠のなどの差異により、アジア大陸各地域においても特有の鞍構造と形式が誕生した。ここではアジア大陸の各地域の木製鞍の関連性を探り、アジア大陸の鞍の流れ及び各地域の木製鞍の特徴によって分類し、それらを簡潔に説明する。

林俊雄の『鞍と鐙』⁵³(1996年)中に、アジア大陸の鞍は、軟式鞍から硬式鞍に変化していくと書かれている。

「紀元前2000年～紀元前1000年紀初頃には、鞍というものはまだ知られなく、大体馬の背に薄い敷物をかぶせる程度である。紀元前5世紀から紀元前3世紀に入ると、ユーラシアの遊牧民族から、この薄い敷物が進化して厚みのある座布団のような軟式鞍が出現し、中国北部までに広く普及した。そして、紀元前二世紀から一世紀までにアルタイの大カタンド古墳から馬の木彫を出土し、馬の背中に前後がやや盛り上がっているものは鞍のようなものが見られる。これは軟式鞍とは差異があり、硬式鞍が考えられるが、後世の木製鞍の初期形式でもいえることである。」

張濤の『秦始皇兵馬俑』(1999年)のなかでも

「……馬鞍的考古最早發現在阿爾泰地巴澤雷克古墓（屬公元前45世紀）、這是目前出古最早的馬鞍……漠北諾顏山匈奴6號古墓（屬公元前一世紀至公元一世紀）有殘破的木馬鞍、米努辛斯克地區有屬於公元一世紀初的木質馬鞍……這些都是匈奴人的遺物。」⁵⁴と記述されている。

鞍の考古については、最初発見した鞍は南シベリアのアルタイ地方（現ロシア連邦）のパジリク古墳群（前3世紀前半頃）から出土した鞍だと思われる。出土した鞍は、木製鞍ではなく、革で作られ、革と革の間に鹿の毛や草などを詰め、座布団のような敷物形の鞍(図6)である。パジリク5号墳から出土したフェルト製の壁掛けには、騎馬する男性が見られる。その男性が乗っている鞍は、前輪・後輪から見ると少し高く、座布団のような軟式鞍の形が見られ、尻しりがい繫を装着し、面繫と胸繫についている(図7)。北モンゴル、ノイン・ウラ6号墳から出土した木製品の破片(図8)を発見され、前輪と後輪に当たる部分が見られるために、鞍ではないかと思われる。ミヌシンスク盆地にも約1世紀初期頃の木製鞍が発掘された。この数々な遺跡は匈奴

⁵³ 林俊雄、『鞍と鐙－創価大学人文論集 第08号』、創価大学人文学会、1996年

⁵⁴ 張濤、『秦始皇兵馬俑』、芸術家出版社、台北、1999年、p70-p71

という遊牧民族の古墳と確認され、最初木製鞍を使用していたのは中央ユーラシア地域にある匈奴⁵⁵（前4世紀頃～5世紀）という遊牧民族を推測できる。



図6：パジリク1号墳、軟式鞍復元図、(前5世紀後半)



図7：パジリク古墳から騎馬する男、(エルミタージュ美術館蔵/ 図：出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』)



図8：北モンゴル、ノイン=ウラ6号墳、鞍橋復元(前1世紀)

ボルジギン・N・オルトナストの『モンゴルの遊牧畜牧文化における馬具の儀礼的地位相—馬具に関するユールを事例に一』に

「鞍によって所用する人の財産や社会における地位までも示すものである。」⁵⁶とある。アジア大陸の騎馬民族において鞍は移動の道具だけではなく、特に匈奴民族では遊牧生活において鞍は重要な馬具の一つとして発展し、時代の流れにそって、中央アジア鞍（19世紀）（図9）、モンゴル鞍（20世紀）（図10）、チベット鞍（19世紀）（図11）などの地域でも広く追及しており、中国鞍（18世紀）（図12）だけではなく、朝鮮鞍（図13）、琉球鞍（図14）もその影響を受けている。鞍の構造や加飾などの作り方は地域によって異なり、基本的に鞍の本体は木製であり、装飾は革や骨や金属などの素材が使われ、複雑の構造を持っている。日本の鞍と比べるとかなり違いがみられる。



図9 中央アジア鞍

(画像：馬と人を結ぶもの鞍の世界)



図10 モンゴル鞍

(画像：馬と人を結ぶもの鞍の世界)



図11 チベット鞍

(画像：馬と人を結ぶもの鞍の世界)

⁵⁵ 匈奴は、前4世紀頃～5世紀にかけてモンゴル高原を中心とした中央ユーラシア東部に存在した遊牧民族。

⁵⁶ ボルジギン・N・オルトナスト、『モンゴルの遊牧畜牧文化における馬具の儀礼的地位相—馬具に関するユールを事例に一』、千葉大学社会文化科学研究 8、p219-p231、2004年



図12 中国鞍
 (画像：馬と人を結ぶもの鞍の世界)

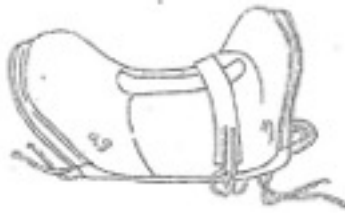


図13 琉球鞍
 画像提供：古今要覧稿



図14 朝鮮鞍
 画像提供：古今要覧稿

中国の木製鞍は、最初に前漢(紀元前206年～8年)末期に出現し、この鞍形は平坦で全体に低い(図15)。河南省鄭州南関(3世紀末～4世紀前半)出土の陶馬では両輪はかなり高く立っている。その後、湖北省武昌馬房山と河南省北部にある西晋時代(4世紀頃)の古墳―「安陽孝民屯」から出土した2つの鞍(図16、図17)では、居木で前輪と後輪を垂直に立った形式が見られる。この前輪・後輪を垂直に立った木製鞍は高橋鞍⁵⁷と呼ばれる。魏晋南北朝時代(222年～589年)以降、高橋鞍と鐙を発見され、実用しながら改進し、中国馬具一式の基本形が生まれたことが確認された。その後この高橋鞍の構造を基に中国鞍を発展して現在に至っている。



図15：前漢の鞍 (模型)
 (画像：中國古代車輿馬具)

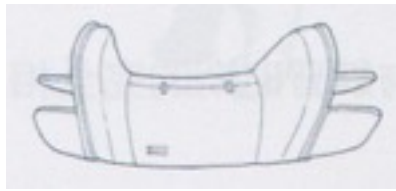


図16：安陽孝民屯出土した鞍
 (画像：中國古代車輿馬具)



図17 安陽孝民屯出土した鞍
 (画像：中國古代車輿馬具)

2、台湾の民族と鞍の関係

台湾の気候は高温多湿で四季がない。台湾島の地形は山地、丘陵地、盆地、台地、平野により構成されている。山地、丘陵地が全島面積の三分の二を占めている山岳中心の地形であり、馬の成育及び繁殖の環境としては適しているとはいえず、馬は極めて生息数の少ない種とされていた。台湾に数千年の昔から暮らしていた先住民は、騎馬民族ではなかったとされる。16世紀後半以降の大航海時代に入ると、台湾の戦略的重要性が注目されるようになったため、ヨーロッパであるオランダ、スペインの政権から台湾への侵略がなされたが、実際に長く有効の支配ではオランダである。そのころから台湾に生息する馬の数や馬具についても変化があると見られる。

⁵⁷ 高橋鞍とは、中国では木製で船のような形である鞍橋を称す。鞍橋の構造は前後が高く、人間は騎乗するときに、馬との平衡状態になり、機能性と安定性がある。

オランダ植民統治時代（1624年～1662年）に入ると、オランダ人が台湾を統治するため、馬が輸入されるようになってきたが、その時代における輸入馬の数量は不明である。『臺南縣志：卷十附録』⁵⁸には記載している部分を見ると：

「（1636年2月24日）佑紐斯(Lieutenant)帶兵(騎兵六七十，歩兵五六十人)巡視蕭壠、蔴豆、目加溜灣、哆囉嘓諸社、宣揚武威。」

「（1636年12月6日）佑紐斯及朱里生(Lieutenant Jurieansen)奉命帶騎兵六、七人，歩兵五、六十人、巡視蕭壠、目加溜灣、蔴豆諸社。」と記されている。

ここでは騎兵は「六七十」とあるのでおそらく、当時の馬は70頭以上があると考えられる。馬は基本的にオランダ人しか乗らなかったため、西洋式の革鞍を用いられたと推測しうる。フレデリック・コイエット⁵⁹により書かれた『無視された台湾（'t Verwaerloosde Formosa）』（1675年）（図18、図19）中の「ゼーランディア城の降伏図」には騎乗した人物がみられる。



図18 ゼーランディア城の降伏



図19馬を乗られている人

（図：無視された台湾（'t Verwaerloosde Formosa））

鄭氏政權時期（1662年～1683年）に、鄭成功は軍隊を擁して台湾に上陸し、台湾を「反清復明」の拠点にすることとして軍政を中心とした政治を行った。清朝の江日昇が書かれた『台湾外記』⁶⁰の巻五では

「四月、建威伯右提督馬信⁶¹為提督驍騎親軍，同忠定伯林習山守烈嶼。」と記載されるが、その「驍騎」とは強い騎兵連隊の意味である。当時鄭成功の軍隊について主要な部隊の編成や配置を見ると、「驍騎」という騎兵連隊が配置したことが分かってきた。鄭氏時代に府城の南部（現台南市府前路の周辺）には「馬兵營」（図20）と呼ばれているが、当時騎兵連隊兵營の場所であると考えられる。鄭成功は軍事用

⁵⁸ 洪波浪、『臺南縣志：卷十附録』、臺南縣政府、1980年、p150

⁵⁹ フレデリック・コイエットとは、オランダ東インド会社の最後の台湾行政長官である。

⁶⁰ 江日昇、『台湾外記-10巻』、文叢60、臺北：臺灣銀行經濟研究室、1995年

⁶¹ 馬信とは、本来清の武将であるが、鄭成功に帰順し重臣となっていた。ゼーランディア城包圍戦の時に、馬信が自らの騎兵軍隊を率いて、ゼーランディア城を包圍し、陥落させた。そのため、「馬本督（Bepontok）」（当時馬信は「提督親軍驍騎鎮」の官職であった）という威名をオランダに鳴り響いた。出典：『臺灣歴史人物小傳-明清暨日據時期』、國家圖書館、2003年、p391

として大量に馬を導入していると推測できる。特徴としてはこの時期に明朝式の鞍（図21）を使用していると推測される。



図20 台南である「馬兵營」の碑
（写真：葉翠馨）



図21 明朝鞍復元図
（画像：中國古代車輿馬具）



図22 清朝鞍
（図：古今要覧稿）

清朝統治時代（1683年～1895年）に関する台湾の馬事情についての記載は、清代の郁永河の『裨海紀遊』⁶²（別名：『採硫日記』）に：

「地不産馬、内地馬又艱於渡海、雖設兵萬人、營馬不滿千匹。文武各官乘肩輿、自正印以下、出入皆騎黃犢。市中挽運百物、民間男婦遠適者、皆用犢車」。
とある。その時馬の数は鄭氏政権時期よりも少ないと考えられる。恐らく、清時代初頭に台湾では馬を重要視していなかったために清朝の統治としては消極的だったのだろう。康熙六十（1721）年「朱一貴の乱」は鎮圧され、一時期に軍馬を導入したが、雍正七（1729）年にまた廃止されている。鄭氏政権時期と清朝統治時代には台湾の馬はすべて大陸から移入され、当時使用されている鞍は清朝鞍で（図22）あることが推測できる。

江戸時代末期になってから日本では西洋式の競馬が入ってきたことにより、革で作られた鞍が輸入された。特に明治維新で近代化政策が推進されたため、日本鞍はすでに西洋の革鞍に代わられた。台湾では、日本統治時代（1895年～1945年）に馬が当時の植民地支配の有効的な手段であったため、日本の軍隊や警察などはよく馬を使用し、政府側も馬の成育を奨励した。1928年台北では競馬が始まり、台湾において競馬のブームが巻き起こっている。1938年(昭和13年)に台湾競馬令が施行されている。当時の台湾では日本の支配下にあったため、競走馬はすべて日本内地からの輸入であり、その後繁殖が行われ、西洋の馬の鞍が使われたことは当然のことであった。

第二次世界大戦後（1945年-現在）の台湾の馬事情については、大きな変化がみられる。1945年日本の敗戦とともに、台湾に残されたのは、体力的に弱った馬や軍馬としてその性能が限られている馬であった。その後、蒋介石が率いる中華民国（台

⁶² (清)郁永河、『裨海紀遊卷 卷上』、方豪合校本、臺北:臺灣銀行經濟研究室、1959年

湾) 政府が台湾に上陸し、馬の繁殖や管理など業務は「聯勤司令部」⁶³で行い、中華民国の軍隊である騎兵連隊が配置され、台湾の馬の生息数はその後増加をみた。この時期に馬の成育はすべて軍隊で管理され、騎乗が許されたのは軍人のみであった。1950年代以降、軍隊における騎兵連隊は解除され、本来戦争の用途として用いられた馬は各地の農業学校や民間の企業へと移入された。その後数々の民間乗馬クラブが設立され、乗馬は公的な機関の統治手段から庶民的な運動へと形が変わっていった。今までは、乗馬は趣味でもありながら、競馬や馬術というスポーツの世界でも広まり、その際に使用される鞍は世界で共通な乗馬用鞍である。

日本は長い歴史の中で、アジア大陸の騎馬文化の影響を受け入れ、その木製鞍の構造や意匠を吸収しながら独特の日本鞍を形成した。しかし、台湾の場合はその自然環境を考えると、本来馬の繁殖生存環境として不適合であった。また、歴史背景もオランダ殖民統治時代からはじまり、オランダ人、スペイン人、漢人、満州人、日本人など外部からの人間による支配が繰り返されたため、馬の生息数や用途などは各時期の殖民支配者により、変化していくことになった。もちろん使用している馬具もさまざまな騎馬文化によって変化していったが、台湾は大和鞍のように長年にわたって外来の文化を融合し、自分の鞍形式を発展し、育むことはできなかった。

第2節 乗馬風習と大和鞍の起源

日本の馬に関する最古の記載の『古事記』のなかで、「天照大御突、坐二忌服屋一而、令レ織二突御衣一之時、穿二其服屋之頂、髓二搭天斑馬一搭而、館二墮入一時、天衣織女見驚而、於レ梭衝二陰上一而死」⁶⁴と見られ、また『日本書紀』においても「又見天照大神 方織神衣 居齋服殿 則剥天斑駒 穿殿薨而投納」⁶⁵と記されている。「天斑駒」と「天斑馬」は、「馬」という生き物を指していると考えられ、皮を剥ぎ殺されたという解釈と思われる。ただし日本書紀や古事記に書かれている神話に馬の話があっても、神代以前の日本列島には馬という生物が生息しているかどうか、史実として信用し難いということは認めざるを得ない。

⁶³ 聯合後勤司令部とは、中華民国国防部のひとつ部門であり、旧称は聯合勤務總司令部、略称は聯勤總部である。中華民国の軍隊の食糧、軍用品、武器砲弾、ガソリンなどの補充や基地、装備、車両などの整備に関する業務を行っている。2012年12月28日国防組織の改編のため、中華民国陸軍にある陸軍保修指揮部と併合した。

⁶⁴ 『古事記 上巻 天照大神と須佐之男命 天の岩戸』 712年(和銅5年)

⁶⁵ 『日本書紀 卷第一 神代上 第七段』 720年(養老4年)

しかし、愛知県の熱田高倉貝塚⁶⁶を始め、鹿児島県の出水貝塚⁶⁷や、神奈川県小平塚豊田本郷などの調査報告や論文に、いくつかの縄文時代や弥生時代の遺跡から馬の骨が発見されたと記されている。はっきり馬の骨が確認できるのは、約5世紀中頃の遺跡であり、宮崎県六野原地下式横穴墓群八号墓である。本遺跡から出土した骨は、馬は轡を口に装着したままの姿で墓に葬られていた。古墳時代初期（約4世紀～5世紀初頭）の墳墓群である福岡県甘木市の池の上墳墓6号墳から出土した轡は、現在日本最古の馬具ではないかと考えられる。だが、日本の古墳時代において馬の用途は、家畜として飼われたか、軍事や運搬、農耕などに用いられたか、食用にされたかは未だ不明である。ただ、古墳時代後期の多くの遺跡から埴輪馬（図23）、石馬、土馬などが出土し、恐らく、当時は祭祀儀礼を中心であったと推測される。発掘した馬形の埴輪を見ると、馬の装飾は古墳時代の美意識や信仰思想を知ることができる貴重な資料である。5世紀頃では、馬具はアジア大陸から伝わった舶載品とみられる。古くより馬は神聖な生き物であり、神の使いとされてきた。特に馬の埴輪は埴輪の中でも重要なものであり、権力と武力の象徴として考えられる。そのため、出土した馬の埴輪はさまざまな装飾をちりばめた豪華な造りである。ほかの動物埴輪と比べて、豪華な馬埴輪を所有することができたのは国の権力者や社会的地位の高い人物である。



図23 埴輪馬
(画像：東京国立博物館)



図24 木製鞍
(画像：下田東遺跡発掘調査概報Ⅱ)

馬具の中で最も中心となるのは鞍であり、発明された時期に関しては確かな年代の推測が難しい。ただし、奈良県香芝市の下田東遺跡（図24）で、5世紀中頃の木製鞍の一部が出土しており、大阪府八尾南遺跡（図25）、福岡県吉武遺跡の発見例と並び、木製鞍としては日本国内の最古例である。鞍の装飾部分は、実際に古墳時代から鞍は素木の簡素な造りがよく見られる。例外として、大阪府四條畷市葦屋北遺跡から発掘された黒漆塗り鞍（5世紀中頃）（図26）である。この鞍は素木造りではなく、表面に黒漆が塗られた痕跡があり、古墳時代にも漆の装飾技法があることを証明できる

⁶⁶ 鍵谷徳三郎、「尾張熱田高倉貝塚實査」、東京人類學會雜誌 23(266)、p275-p283、1908年

⁶⁷ 林田重幸 [他]、「出水貝塚の馬について」、鹿児島大學農學部學術報告 4、p70-p77、1955年



図25 木製鞍
(画像：八尾市文化財調査研究会報告47)



図26 黒漆塗り木製鞍
(画像：部屋北遺跡発掘調査概要3)

木製鞍に対し、金銅製の鞍金具は5世紀後半以降、主に6世紀を中心として各地で発見される。奈良県生駒郡斑鳩町藤ノ木古墳（6世紀後期）から出土したのは前輪・後輪に金銅装透彫金具を貼った鞍である。この金銅製鞍金具は熟達金工技術としてよく知られている。残念ながら素地の部分は全て腐朽して痕跡はすでに消失している。出口祐資の「藤ノ木古墳の金銅製鞍金具に関する一考察」のなかには：

「朝鮮半島系大刀装具の工人と中国系の工人はプロジェクトチームを組んで日本列島で作りあげた豪華な鞍と推定される⁶⁸。」としている。この時期は鞍の構造や機能性より装飾のほうが重視される。出土した鞍の前輪・後輪の部分は垂直な形がみられ、中国の魏晋南北朝時代に朝鮮半島に伝わった鞍の形と近似している、恐らくアジア大陸からの伝世か或いは同じような形式の模倣品であるかと思われる。日本鞍の変遷については、竹之内一昭の『中世アジアの皮革 3.日本』にも

「日本鞍と言うのは、古くは革製であったが、中国から木製の鞍は古墳時代に輸入され、その後日本でも作られた⁶⁹。」と記されている。アジア大陸系の木製鞍は朝鮮半島を経て、古墳時代に日本の鞍に強い影響を与えた。

王克林の『骑马民族文化渊源初探』（2001年）のなかにも以下のように書かれている：

「古代的骑马民族文化，自在欧亚大草原的东亚、中亚部分孕育兴起后，以活跃而强有力的生命力，不断向外扩张。大约在公元前2000年后半叶，已伸向古代东方的农业民族文化区。在我国商周时期，车技、骑术有了相继发展和普及。大约在公元3至4世纪的魏晋之际，北方骑马民族文化对朝鲜半岛和日本列岛的海东诸国古文化给以很大影响。特别是对日本古代文化，使其在原有的土著文化基础上增添了新的活力和内容，成为日本具有时代和文化特征的古坟时代文化」⁷⁰。

⁶⁸ 出口祐資（吉村亨ゼミ）、「藤ノ木古墳の金銅製鞍金具に関する一考察」、人間文化学部学生論文集 第8号、京都学園大学人間文化学会、2010年

⁶⁹ 竹之内一昭、『中世アジアの皮革 3.日本』、日本皮革技術協会、2011年、p4

⁷⁰ 王克林、『骑马民族文化渊源初探—兼论与日本古坟时代文化的关系』、《文物世界》(太原)3期、p15-p27、2001年

訳文：古代騎馬民族が強い生命力を持ち、アジア大陸に活躍し、ユーラシア・ステップの東部、中央部から始まり、周りに段々勢力を拡大し、紀元前2000年後半には東アジアの農業民族の地域までに辿り着いた。中国の商、周時代では、馬車の普及と騎馬の技術が連動して発展し、魏晉南北朝時代(3世紀～4世紀)に入ると、アジア大陸の木製鞍は朝鮮半島に伝わった。そして、古墳時代(5世紀頃)に日本に伝わったことを推測できる。アジア大陸にある北の騎馬民族文化は、朝鮮半島、日本列島および東北アジア諸国古代文化に強い影響を与えた。

唐時代(7世紀初)に鞍の出土事例は数が多く、その中に新疆烏魯木齊鹽湖南山2号墓の木製鞍(図27)では、日本の奈良手向山神社所蔵の唐鞍(図28)とよく似ている⁷¹。

屋代弘賢の『古今要覧稿』には唐鞍に関する記載は

「唐鞍といふは蕃客を迎える時に用いられる物なり…(中略)…延喜式には、大嘗会御禊の行幸は唐の禮なるによりて羣臣唐鞍を用…」とある。

その記載を見ると、平安時代頃に日本は中国から伝わった鞍は唐鞍と呼ばれる。そして、馬具の形式は中国の様式、大和の様式との融合し、唐様式の鞍である。平安時代に唐鞍は外国使節の接待、天皇即位後の大嘗会御禊の行幸などを用いられ、神社でも祭礼の威儀馬として使われた。古くより、唐鞍の特有の様式は調度が困難であるが、省略している唐鞍をよく使用した。今では、奈良手向山神社所蔵の唐鞍は元々の唐様式であり、正式の装具も完備している。



図27 新疆烏魯木齊鹽湖南山2号墓の木製鞍
(図：中國古代車輿馬具)



図28 奈良手向山神社所蔵の唐鞍
(図：中國古代車輿馬具)



図29 朝鮮三国時代の銅金具鞍
(画像：中國古代車輿馬具)

大和鞍(倭鞍とも呼ぶ)は中国様式の唐鞍に対し、和様式の馬具と呼ばれる。この大和鞍は古墳時代に中国から伝わった木製鞍を発展し、変化した馬具と考えられる。古墳時代に大和鞍発達の過程においては、中央ユーラシアの遊牧民族の木製鞍がその起源と考えられ、中国の魏晉南北朝時代「安陽孝民屯」と「遼寧朝陽袁台子」の古墳から出土した前輪・後輪垂直型の木製鞍(高橋鞍)と吉林集安の高句麗(朝

⁷¹ 刘永華、『中國古代車輿馬具』、清華大学出版社、p305、2013年、p266～268

鮮の古代三国の一つ)古墳から出土した銅金具鞍(図29)などのアジア大陸系の鞍を強く影響を受け、日本の文化、独特な美意識及び工芸技術などが複合して独自の鞍に変化したと考えてよい。

時代の流れとともに、乗馬の風習や作戦の形態も変わってきて、日本馬具の中でも特に鞍は時代の流行を反映し、環境の異なる各地域での用途に応じ、造形、素材、技法、意匠などに変化を与え、江戸時代末期までに日本文化や環境に合わせた独自の鞍が発達した。

第3節 大和鞍の流れ

日本の鞍は、前輪・後輪を左右に分け居木で繋ぎ、組み合わせるのが基本的な構造である。特に前輪・後輪は、指し物や彫刻などの真っ直ぐな一本の木から削るのではなく、曲がって育った曲がり木材を使用し、前輪・後輪が直立している独特な形をしたものが一般的に大和鞍とも呼ばれている。

『日本馬具大鑑⁷²』に：

「日本鞍は主に形態の変化によって、古代の鞍、中世の鞍、近世の鞍で概略三時期に分けられる。」と記されている。本稿では『日本馬具大鑑』の分類法に従い、古代、中世、近世の時代別に分類する。

1、古代(古墳時代、奈良時代～平安時代後期)

古墳時代(約5世紀中)の香芝市下田東遺跡と八尾市南遺跡の古墳から出土した木製鞍(図18、図19)は、日本鞍としては日本国内の最古例といえる。古墳時代には木製鞍が多く出土している。素地の材料としては、栗、檜、山桑、シャシャンボなどの木材が使われているが、経年劣化により居木がほとんど欠損し、前輪・後輪の残片が残っているのみである。ただし、残っている前輪・後輪の残片と古墳から発掘された埴輪馬(図30)、石馬、土馬などを見ると、この時期の鞍(図31)は両輪と居木の木組の構造であり、前後輪が垂直に立った、中国の魏晋南北朝時代の木製鞍(図32)や新羅(朝鮮三国)時代の木製鞍(図33)の構造と似ている。奈良時代から鞍形式は、古墳時代より完成度が高くなっている。

正倉院には、天平時代(8世紀中頃)の美術工芸品として収蔵されている中に武器・馬具など特に木製鞍が含まれ、学術的価値が高い。正倉院に収蔵される木製鞍では、「日本の武器武具概説 6馬具」の中に：

「現存する最古の例が正倉院に納められた十背の鞍である。正倉院の特徴の第一は居木が左右2枚ずつの4枚構成になっている点である…(中略)…他には中世、近

⁷² 日本馬具大鑑編集委員会、『日本馬具大鑑』、全4巻、日本中央競馬会、1991年

世を通じてその例を見ない⁷³。」としている。奈良時代には日本鞍の独特な構造を発達し、正倉院に納めた素木造りの鞍は古代鞍形式の代表的な作例といえる。

日本の馬は、古墳時代から平安前期までは戦争に用いられるより権力や武力の象徴であったことは飾り馬としての豪華な意匠が示している。平安時代からに、武士階級の地位が上がって、鞍は元々神仏や公家などへの献上品から一転して武士の権力を示しものとなっている。

加飾では、平安時代には漆を塗られた器物が多くなっている。「西宮記」は平安時代中期頃に源高明によって撰述された有職故実・儀式書である。そのなかに、加飾鞍については

「凡倭鞍有水精地、銀地、鏡地、黒地、龜甲地、蒔繪地、螺鈿地等」と記される。平安時代に日本鞍の種類が加飾の技術により、すでに分類していて、当時から加飾鞍を使用していることがわかった。



図30埴輪馬(古墳時代)文化庁蔵
(画像：馬の博物誌)



図31藤ノ木古墳出土鞍金具後輪
(画像：古代の技-藤ノ木古墳の馬具は語る)



図32金銅馬鞍 (朝鮮三国時代)
(画像：東京国立博物館)



図33東晋時代古墳から出土鞍復元図
(画像：中國古代車輿馬具)

⁷³ 東京国立博物館編、『日本の武器武具：特別展図録』、東京国立博物館、1977年、p364

2、中世（平安時代後期～室町時代後期）

中世鞍は古代の鞍のような公家など上層階級や信仰儀式のために使用するのが主な目的ではなくなり、武家の実用品に変化する。「古今要覧稿第2冊第百四十五卷」⁷⁴の中に、

「中古鞍制作 武家所用、延喜式に御鞍女鞍走馬鞍その制度おのく同じからず然れば軍團に用ひらる、鞍の制作又常用のもの……」と記載される。ここに示されるように中世に入ると鞍は武家が主に実用として用いるようになってきた。大化改新(645年)以降では公牧制度が整備され、牧場も国家による制度化が行われ、馬の生産量が増大した。この時代騎馬武者が主力であった時代と思われ、本格的騎馬戦という新たな戦術が幕を開け始めた。そのときに大陸系の鞍形から少しずつ変化し始め、日本鞍は独自にその形を形成していく。素地基本構造や加飾は古代の鞍とは大きな差異があり、古代鞍と中世鞍にはっきり分けられると考えられる。

古代鞍と中世鞍の変化は平安時代後期と考えられ、この二つにははっきりと差異が見られる。平安時代後期に入ると鞍橋の構造は、古代鞍の形と全く異なって、新しい鞍が出現する。この時に、日本鞍独自の構造は発展を始めた。中世の鞍は、前輪・後輪の外側に洲浜形・馬膚は厚く、山形の側は薄く造られ、素地の厚い部分と薄い部分の境界は稜線で区切りがあり、要するに『海』と称する窪んだ部分と『磯』と称する高まった部分のあることがその時代の鞍(海有鞍)の特徴である。また、古代鞍に較べて幅狭い二枚居木になっている。

螺鈿の技法は、中国由來說あるいは、日本固有説もあり、今までも断定し難い状況にある。奈良時代には螺鈿技法が盛行し、平安時代から鎌倉時代にかけて、螺鈿は鞍の装飾として流行しつつあり、螺鈿鞍の優品がよく見られるようになった。だが南北朝・室町以降には螺鈿鞍の流行が急速に衰えてしまい、代わりに蒔絵、沈金、平文などの加飾技法で飾られている鞍が主流となっている。現存する中世の螺鈿鞍は約十数背を数えるが、そのなかに、東京国立博物館に所蔵の平安時代(12世紀)に作られた「萩螺鈿鞍」(図34)は螺鈿鞍の先駆けをなす作品である「永青文庫」に収蔵している「螺鈿時雨鞍」(鎌倉時代)(図35)は卓越した意匠と純熟の螺鈿技術であり、中世の螺鈿鞍の代表的な作品といえる。



図34萩螺鈿鞍(12世紀)
(写真：東京国立博物館)



図35螺鈿時雨鞍(鎌倉時代)
(写真：文化遺産データベース)

⁷⁴屋代弘賢(1758-1841)、『古今要覧稿第2冊』、国書刊行会、全6巻、1907年

3、近世（室町時代後期、桃山時代～江戸時代）

江戸時代の有職故実家であり、武器考証家でもある栗原信充の着書『鞍鑑名所記』⁷⁵の中に、

「近世の鞍を大きく軍陣鞍と水干鞍二つに分類している。」と述べている。『日本馬具大鑑 第4巻近世』にも

「鞍の構造の面から見て、軍陣鞍、水干鞍、海有鞍、海無鞍が4種類の形がある。」と記される。

室町時代以降、各地では群雄が割拠し、特に戦国時代に入ると、戦国大名たちが天下統一を目指して覇権を争った。当時鞍は戦う際の武器としても用いられた軍用品であり、武家の勢力、地位の象徴でもある。室町時代末期から軍陣鞍がよく見られるようになる。しかし桃山時代から江戸時代までに水干鞍のほうが多く作られるようになった。この時期の鞍では、軍陣鞍と水干鞍の構造を基に海有と海無の変化が加わる。鞍の形式は鞍橋構造の実用性よりも装飾など外観の要素が重要視されている。また、桃山時代から西洋の文化も入ってきて、江戸時代に入ると様々な加飾技法発達し、そのなかには蒔絵、螺鈿、平文、木彫、革包鞍の技法などがある。江戸時代の鞍の構造には、中世と大きな差異がない。しかし、その後太平の世をむかえ、軍陣鞍のかわりに略装の時に使われている軽快な水干鞍多くみられるようになり、中世よりもっと高い加飾技術と独創的な意匠が生まれ、各々の武将の好みに応じたさまざまな新たな意匠のものが作られるようになった。

たとえば、桃山時代の「葦穂蒔絵鞍」（図36）は豊臣秀吉所用と伝えられる鞍であり、金の高蒔絵と金具を用いて、当時においてかなり大胆な意匠である。江戸時代の「金銅鷹匠道具文鞍」（図37）は海有の軍陣鞍の形式であり、異素材を飾られて、武将自身の趣味や好みを感じられる。この時代の特徴として、日本鞍はアジア大陸、朝鮮半島由来でありながら日本で独自の発展を遂げて世界的に見てもレベルの高い優れた装飾の鞍が多く出現し、今では歴史的に価値が高いことである。しかし、明治時代に入ると、西洋技術や知識が導入され、フランスやドイツから教官を招いて皮革で作られた西洋式の鞍に変化した。その後、残念ながら現在までのところ日本鞍が再び使われていない。



図36葦穂蒔絵鞍（写真：東京国立博物館）



図37金銅鷹匠道具文鞍（写真：東京国立博物館）

⁷⁵栗原信充、『鞍鑑名所記』、江戸時代

第三章 水干鞍の出現

第1節 軍陣鞍と水干鞍の変遷

最も古い作例としての水干鞍に関する記載の文献は筆者の調査によれば「禁秘抄講義」である。「禁秘抄」は、承久三⁷⁶（1221）年に順徳天皇が成立し、朝廷における毎月の恒例行事や国家的な儀式作法などの解説書であるが、そのなかに「隨身移馬。或前駟馬。無定様。如近衛将用水干鞍である。」記載されている。これにより水干鞍は平安時代にすでに出現したことが推測できる。しかし、現存している平安時代の鞍は水干鞍の形式に似ているものは散見しないので、その存在を確認することはできない。

水干鞍の「水干」については以下のように検証した。

『平安朝服飾百科辞典』では「水干」については

「水干・水旱 糊を用いないで水張りにして干した絹。またそれで作った衣服。狩衣の一種であるがやや短小……官服ではない、ので貴賤ともに用いたが、平安末から無位の官人、また武者装束や一般大衆の晴れ着、子供の晴れ着などに用いた⁷⁷。」

渡辺素舟の著書「日本服飾美術史」の中にでも「水干」については

「水干は水干（みずほし）である。糊なしの水張りで天日に干した絹のことであり、それが服の名となったものである。特に水干は狩衣のすいかんのところであり、制は狩衣に同じであるが……むろん、それは狩衣からの分化であろう。もともと民間の衣服であったが便利だから、公卿も着るようになり、鎌倉時代には武士の礼服にもなったから……庶民一般も着れば白拍子も着たから、実用てきに利便であった……。」⁷⁸と記される。

屋代弘賢の『古今要覧稿』では

「水干鞍は、戎衣ならざる時に用ゆる鞍なりをのはじめ詳かならずけだし今世に常用とする者即是なりその故は山形あつく乗間弘きは草摺のたたまりをうけまたは腹をふせがながためにして即戎衣の時の鞍なり此水干鞍といふな山形うすく乗間せまきが故に鞍小さく角たたす今にても正しく…。」⁷⁹と書かれている。

それらの史料を見ると、水干は狩衣本来の形状と大きな差異がない。糊を使わずに水張りにして天日干した絹で仕立てられたため水干で呼ばれたと考えられる。当

⁷⁶ 関根正直 述、『禁秘抄講義下巻68内裏焼亡』、六合館、1927年、p42

⁷⁷ あかね会、『平安朝服飾百科辞典』、講談社、1975年、p476

⁷⁸ 渡辺素舟、『日本服飾美術史』、雄山閣、1973年、p196-p197

⁷⁹ 屋代弘賢、古今要覧稿第2巻、東京、国書刊行会、746p、1906年、p572

初一般庶民が日常着として用いていたが、平安・鎌倉時代以降に公家・武家も日常着として水干を着て騎乗するようにもなった。公家・武士・庶民達が身分問わず水干を着用している様子が平安・鎌倉時代の絵巻によく見られる。水干鞍という言葉は日常着の時に使う装備が省略され鞍に乗るという意味を持っていたことが推測できる。

だが、水干鞍の構成と使用規則は江戸時代の国学者にある塙保己一（1746年～1821年）の「群書類従一布衣⁸⁰記」では

「鞍は水干鞍、切付はあざらしの皮、上敷同皮、或師子面皮、力皮、獅子丸にて上をつつむ、ふせぐみあるべし、轡は鏡ぐつは也、しをでのくつ、腹帯、鐙は白鐙、舌長胸より肩まで白……。」⁸¹と記載される。

この「群書類従一布衣記」の記載を見ると、水干鞍は日常騎馬の際に乗用するために、装備が省略し、軽快な馬具使われたが、元和元（1615）年に幕府は布衣が旗本の礼装に採用し、水干鞍は「御目見」の資格を持つ武士以上しか使用できないものとなった。水干鞍の皆具⁸²についての規準もそのとき頃からはすでに完成していることを推測できる。江戸時代になってから太平の時代が続いたため、実戦用の軍陣鞍は用いられることが少なくなり、代わりに水干鞍という略装のとき使鞍タイプが一般的となる。

「水干」の意味に対して「軍陣」は戦闘の時に軍隊を配置や編制することである。「軍陣鞍」は戦の時用いられる軍用品のことと考えられる。

「日本馬具大鑑－近世」⁸³のなかに軍陣鞍についての記載は、「軍陣鞍という名称は、平安時代、鎌倉時代はもとより、室町時代以降の記録も見られない。軍陣鞍の言葉では、江戸時代に入ってから有職家の造語ではないかと思われる。」と記載されている。平安後期から武士が中央の権力を争いのため、武士階級を台頭してきた。武家の政権に確立しつつ、戦を多くなった。中世の鞍は戦争の影響で、鞍素地が高く肉厚であり、前輪・後輪の爪先も太いと見られ、全体に頑丈で実用性に重きが置かれた造りである。加飾については、螺鈿で飾られた鞍を盛行した。

平安時代後期から軍用の鞍として認識されるようになったと考えられる。軍陣鞍という名称は江戸時代からには用いられはじめた言葉であり、おそらく、軍陣鞍は

⁸⁰ 布衣とは、模様と裏地のないもの。狩衣の一種であり、公家の普段着として使われている。江戸幕府は、六位以下、御目見以上の者が着用している。

⁸¹ 塙保己一（江戸時代）、『群書類従 第六輯 布衣記(巻一一七)』、2版、経済雑誌社、p293-p303、1902年、p294

⁸² 鞍皆具とは、鞍橋・鐙・轡・手綱・鞆・腹帯・などの総称。馬具一そろい。鞍具。鞍具足。

出典：松村明、『大辞林 第三版』、株式会社三省堂、2006年

⁸³ 日本馬具大鑑編集委員会、『日本馬具大鑑 第4巻近世』、日本中央競馬会、1991年、p5

中世の軍用鞍の形式をそのまま受継いだものといえる。中世と江戸時代の軍陣鞍を比較すると、江戸時代のものには変化はみられるが、鞍を作る上での基本的な考え方にはほとんど相異はない。室町時代後期から多彩な装飾技術をが発達しはじめ、近世の軍陣鞍は中世鞍より加飾の技法や意匠が変化に富んでいる。

軍陣鞍と水干鞍は出現に関する時間軸上の先後関係については、軍陣鞍から水干鞍への移行ではなく、おそらく平安時代後期、古代鞍から中世鞍へ移行し、その後さまざまな戦さを経て、中世鞍は時代による戦術と武具としての変化に伴って、軍陣鞍と水干鞍二つの形式に分けられるようになった。つまり、軍陣鞍と水干鞍は平安時代後期から並行的な発展していくと考えられる。

第2節 水干鞍と軍陣鞍の差異

『日本の武器武具：特別展図録』では「室町・桃山時代の鞍は、本質的には鎌倉時代のものの延長に過ぎないが、細かく見ていくと、やはり時代の流れと共にかなりの変化を遂げていることがわかる。この時期の鞍が構造、加飾の面から見てかなりはっきりと二つの形式に分けられることである」⁸⁴。と述べている。近代鞍は中世鞍の形式を受継ぎ、平安時代後期から武家の台頭、戦術の変化、素地構造、装飾技法などの変遷により、軍陣鞍と水干鞍は各自それぞれの発展にかかっている。江戸時代になると、有職故実家の栗原信充の『鞍鑑新書』⁸⁵には、近代鞍は軍陣鞍と水干鞍二つに分類していると論述があるが、そして、両方の規矩は明瞭に割出し、軍陣鞍と水干鞍の構造にははっきり分別され、その差異がわかってきた。

基本的に水干鞍と軍陣鞍の形式では、前輪、後輪、二本の居木があり、ほぼ同じ構造が見られているが、素地の面から見ると一番大きいな差異では、前輪・後輪の山高と素地の厚さとが違くと見られる。まず、『鞍鑑新書』により、前輪の規矩は、水干鞍：山の高さは鞍の総高の4分の1である。軍陣鞍：山の高さは鞍の総高の3分の1である。（図38）

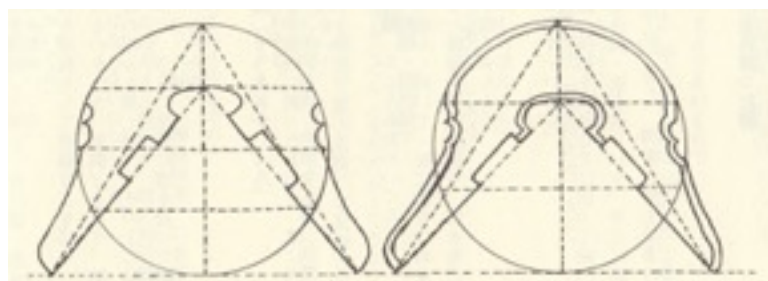


図38 (左) 水干鞍と (右) 軍陣鞍の寸法の割り方
(画像：日本の合戦武具事典)

⁸⁴ 東京国立博物館編、『日本の武器武具：特別展図録』、東京国立博物館、1977年、p364

⁸⁵ 同註3

後輪の側面（図39）に見ると、水干鞍と軍陣鞍に比較し、水干鞍の後輪の厚さは軍陣鞍の後輪より半分以下に見られる。水干鞍の後輪の彎曲部分は軍陣鞍より浅くなっている。居木の幅も軍陣鞍より狭くなっている。また、軍陣鞍は戦闘の時に用いられるが、鞍の外観を保護するために、金銀銅などの金属で覆輪している。前輪・後輪の爪先にも欠損を防止するため、金具をつけられることもある。

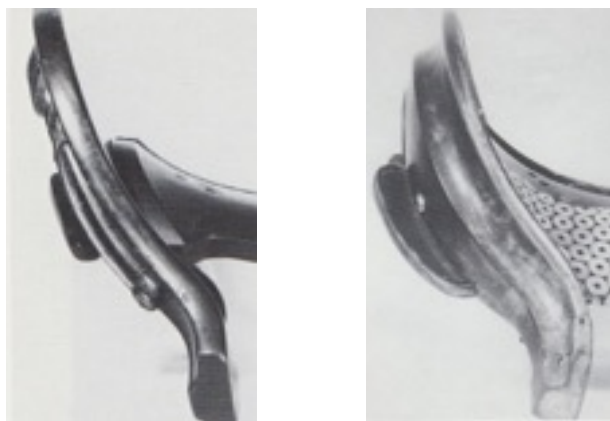


図39 (左) 水干鞍と (右) 軍陣鞍の後輪の側面の比較
(画像：日本の鞍-その形態と美術史の側面について)

水干鞍は略装の際用いる鞍と言われ、戦闘の目的よりも平服の時に使われている。全体の素地が薄く、気軽に騎乗するために、居木の幅狭く、鞍壺が浅くなる。鞍の形は軽快、派手な印象を与える。平安時代に始まり、中世鞍の形式を受け継ぎ、武士や公家が通常の時に水干の装束で騎乗するために作られ、水干鞍という名称をつけられた。室町時代頃から、軍用鞍と同じように手形を設け、水干鞍の形式をすでに完成し、江戸時代までに広く普及している。

軍陣鞍は戦陣に用いる鞍と言われ、もちろん戦闘の目的に作られている。素地は全体に厚く、馬上に動きやすくために、鞍壺が深く、後輪は非常に傾斜である。鞍の重さも中世鞍より超えていると感じ、頑丈な印象を受ける。笹間良彦の『日本の合戦武具事典』には、

「平治元年（1159年）の『平治物語』に悪源太義平が短刀で手形を削って乗ったというのは伝説であるが、この頃から、手形は剝られ、軍陣鞍の特徴であると考えられる。」⁸⁶と述べている。水干鞍と同じに平安時代に始まり、中世鞍の形式を受継い、武家は甲冑を着用し、戦の時に使用するため、手形を設けた。軍陣鞍という名称を生じた。

⁸⁶ 笹間良彦、『日本の合戦武具事典』、東京、柏書房、390p、1999年、p321

第3節 水干鞍の装飾について

水干鞍という名称は平安時代にすでに現れると推定できる。だが、現存している伝世品である水干鞍は、大体室町・桃山時代から江戸時代までのものと推測される。安土桃山時代という三十年間に豪壮・華麗を極めた文化が開いたため、水干鞍の過飾技術も発達した。その後江戸時代になり、「徳川氏の天下を掌握するや京都の美術工芸家の多くは江戸に集まった。……泰平は一般の工芸と共に髹漆蒔絵の技術に進歩は発達した。」⁸⁷とされた。桃山時代から江戸時代にかけて、漆工芸における装飾の技術が大きく発達したことは明らかである。特に江戸時代に将軍や大名は漆工芸を推奨したため、当時の漆職人たちは漆技術は発達を見せ、高蒔絵、研出蒔絵、肉合研出蒔絵などの蒔絵技法が精巧無比の極致に達した。

桃山時代から江戸時代に「日本の武器・武具の中で、日本馬具の中で最も重要であり⁸⁸」、代表的な鞍の一つである水干鞍が、鞍の構造と形式として成熟し、その洗練した軽快な鞍素地や、精巧な漆加飾技法などは今日に至っても世界的に高く評価され、日本伝統工芸の集大成であると表現して間違いはない。以下では、桃山時代から江戸時代までにしか見られない特殊な意匠や加飾技法である水干鞍の作例を整理する。

1、南蛮人鞍

安土桃山時代には、織田信長や豊臣秀吉が南蛮貿易を推奨したため、新しい西洋文化の気風や風俗が入ってきて、南蛮人⁸⁹や紅毛人⁹⁰といった西洋人により、様々な学問、技術、芸術、文学などのこれまで日本人の全く知らなかった新しい芸術文化紹介されたのである。南蛮に影響を受けた意匠が用いられた水干鞍は、古代、中世時期の鞍作品には見受けることの出来ない珍しい意匠がみられ、非常に興味深い。現在残されている南蛮人鞍は、桃山時代（16世紀）の「蒔絵桜花南蛮人文鞍」（図40）、同時代の「南蛮人蒔絵螺鈿鞍」（東京国立博物館蔵）（図41）と「南蛮人蒔

⁸⁷ 沢口悟一、『日本漆工の研究』、美術出版社、p389、1966年、p43

⁸⁸ 斎藤直芳、『甲冑武具研究 第19号目次 馬具講座（1）』、p4

⁸⁹ 南蛮とは、本来、漢民族が中華思想により周辺地域を、東夷・北狄・西戎・南蛮と呼び、四周の異民族やそれらが住む地域を蔑視した呼称と言われている。つまり「南蛮」の「蛮」は、南方の蛮人といった意味で、……日本では16世紀半ば以降、南方からやって来た西洋人を南蛮人と呼んでいて、当時東アジアに進出していたのは、主としてイベリア半島に位置する国の、ポルトガル人とスペイン人であったのだが、日本人が西洋人に対して用いた南蛮人という言葉には、本来の蔑視する意味合いはほとんど無いとみていいだろう。出典：村松英子、『南蛮屏風に見られる服飾表現についての一考察』、山野研究紀要 6、1998年、p68-69

⁹⁰ 江戸時代、オランダ人の称。ポルトガル人やスペイン人を南蛮人と呼んだのに対する呼称とされる。のちには西洋人一般をさした。出典：松村明 編、『大辞林 第三版』、株式会社三省堂、2006年

絵鞍」（東京国立博物館蔵）（図42）及び江戸時代(1604)年の「蒔絵南蛮人文鞍」（池長孟コレクション蔵）（図43）などである。この四背の鞍にはすべて海有の水干鞍の形式が見られ、南蛮人鞍の基準作例として、南蛮文化を知る上でも重要な作例である。その一例として、16世紀、ポルトガルやスペインから伝わった西洋風の服飾（南蛮服）といわれるラッフル襟にカパ（ケープ）をつけ、トランクフォーゼ（スボン）を履いた衣装も南蛮から伝わっている。神戸市立博物館所蔵している狩野内膳筆の「南蛮屏風」（慶長後期）（図44）には、南蛮人の服装を見られる。これら水干鞍の加飾は、南蛮人たちが意図した意匠でありながら、南蛮人の派手な服装や特異な姿勢と表情にも異国特有の魅力を感じられ、当時蒔絵師たち自らの趣味や嗜好に基づいて加えられている。



図40：蒔絵桜花南蛮人文鞍
（画像：東京国立博物館）



図41 南蛮人蒔絵螺鈿鞍
（写真：東京国立博物館）



図42 南蛮人蒔絵鞍
（写真：東京国立博物館）



図43南蛮人蒔絵鞍(17世紀)
（写真：文化遺産データベース）



図44 「南蛮屏風」の一部分
（画像：週刊日本の美をめぐる No.30 織田信長と南蛮屏風）

2、木地鞍

正倉院に納めている木製鞍は素木造りで、平安時代から器物に漆を塗られることを流行し、大和鞍の装飾についても、漆塗り鞍を主流になっているが、現存している江戸時代の素木造りの水干鞍遺品は少ない。

「古今要覧稿」は

「延慶二（1309）年大嘗会御禊記正三位長基卿記…（中略）…木地螺鈿鞍（図45）」と記される。

「平安後期源義家（1039年-1106年）朝臣は白鞍（図46）を足立郡伊興村應現寺に納めた…」と伝えられている。平安時代に木地鞍は出現したことがわかった。また、沢口悟一の『日本漆工の研究』⁹¹に「桃山時代において京師の蒔絵師長府により髹漆せざる素地即ち木地の上に蒔絵することが発明された。しかしその方法は明らかでない。『和漢諸道具見知抄』に、長府は大閤時代京の蒔絵師で木地のものありと記載されてある」と記される。最初木地に蒔絵する技法が桃山時代に生まれたと沢口は記す。桃山時代の「南蛮人蒔絵鞍」（図47）の加飾を見ると木地に高蒔絵で南蛮人たちを着ている派手な服装、文様や表情が描かれているのがわかる。

3、金唐革包鞍



図45 木地螺鈿鞍
「図：古今要覧稿」



図46 白鞍
「図：古今要覧稿」



図47南蛮人蒔絵鞍の加飾の細部「写真：東京国立博物館」

「金唐革」⁹²とは、15世紀にイタリアで生まれ、別名：クオイドーロという皮革工芸である。元々「舶来の革」という意味で、高い芸術性、絢爛豪華な美しさは、革に型押しや彩色の施された大変豪華なものであり、江戸時代に「金唐革」と呼ばれるようになりました。日本はいつ頃伝わったのか定説がないが、現在知られている限り、『徳川実紀-嚴有院殿御實紀卷 廿三』⁹³は日本最初の金唐鞍に関する記録では「寛永二（1662）年 三月朔日月次なり。……入貢の蘭人御覧あり。貢物は猩々緋一種。羅紗三種。……金唐革十枚」と記載している。竹之内一昭、『近世ヨーロッパの皮革 5.革工芸品』（2013年）のなかでも

⁹¹ 沢口悟一、『日本漆工の研究』、美術出版社、p389、1966年、p42

⁹² 「イタリアのフィレンツェでルネッサンス最中の1470年頃に壁の装飾用として作られ、……。江戸時代にはいろいろな呼び名があったが、金唐革という言葉が定着したのは明治になってからである。」 出典：皮革用語辞典、JLIA日本皮革産業連合会、<http://dictionary.jlia.or.jp/detail.php?id=493>

⁹³ 成島家（司直・良讓・柳北の三代）編纂、経済雑誌社 校、『徳川実紀-嚴有院殿御實紀卷 廿三』、経済雑誌社、1904年、p 412

「江戸時代にオランダとの交易により日本に輸入され、「金唐革」と称されて、煙草入れや小物入れ、小箱等に加工された。」⁹⁴と記載されている。それらの記録をみると、日本は江戸時代中期（1662年）にオランダとの貿易により、「金唐革」と技術をすでに伝来したことが推定される。ヨーロッパでは壁革として用いられたが、日本では伝来後まもなく将軍などへの献上品とされ、その後、武士が鞆や甲冑や鞍などに使用した。

江戸時代中期（1662年）に日蘭の貿易によって金唐革が大変流行しているが、寛文八年（1688）幕府は南蛮人との貿易を制限するため、数々輸出入品についての禁止令に頒布した。林復斎（江戸時代）の『通航一覧 第4冊の巻一五五』（巻之138-169 長崎港異国通商総括部）では

「年號月 長崎書付、同年、唐阿蘭陀より持渡り停止の品を定められしが、後また御免の物あり、寛文八年戊申年三月八日、御吟味之上、唐船より日本に持渡り候品々、御停止被仰付候、左之通 一生類 一葉種之外植物類……………一金唐皮 一紅毛箱……」⁹⁵とある。金唐革は日本に輸入することが禁止された。しかし、「停止令」は、いつの世でも表向きだったが、裏では、金唐革で作られた小物などはかなり人気がありつつ、天明年間(1781～1789)には武士や公家だけではなく、一般庶民の生活の中にも浸透し始め、富裕な商人、庶民たちも袋物、煙草入れ、屏風などに用いている。その後に、日本では金唐革の制作がはじまり、日本独自の革技術は発展を遂げた。

東京国立博物館所蔵している金唐革包鞍（18世紀）（図48）では、江戸時代に使用している華やかな金唐革で作られた鞍であり、当時権威がある支配層や富裕階級の象徴として感じられる。しかし、支配層や富裕階級のために作った華やかな金唐革鞍の逆に木地の痛みを隠したり、盗まれた盗難品を隠したり、戦争や戦闘で勝利した戦利品に形を変えたりして残った革包み鞍でもある。

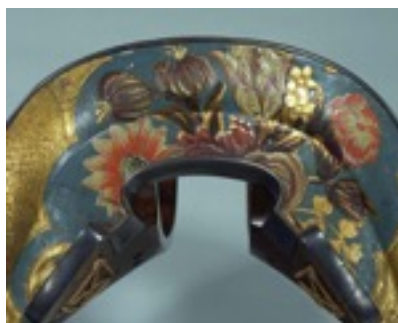


図48金唐革包鞍(18世紀)
「画像：東京国立博物館」

⁹⁴ 『近世ヨーロッパの皮革 5.革工芸品』、皮革科学：hikaku kagaku 59(1)、p9-p21、日本皮革技術協会、2013年

⁹⁵ 林復斎（江戸時代）、『通航一覧 第4冊』（巻一五五）、全8冊、国書刊行会、1913年

第四章 東京藝術大学大学院所蔵「大和鞍」の修復

はじめに

螺鈿鞍は日本鞍の流れにおいて優品が残り、その螺鈿技法は日本の漆工芸技術を述べる際参照されることが多い。東京藝術大学大学美術館所蔵「大和鞍（別名：青貝入和鞍骨）」（図49）一背の保存修復を行うことで修理を通して、素地構造、下地、塗り、加飾の技法や材料を研究し、修復工程を記録することで、今後の水干鞍研究につなげることとする。

第1節 修復概要

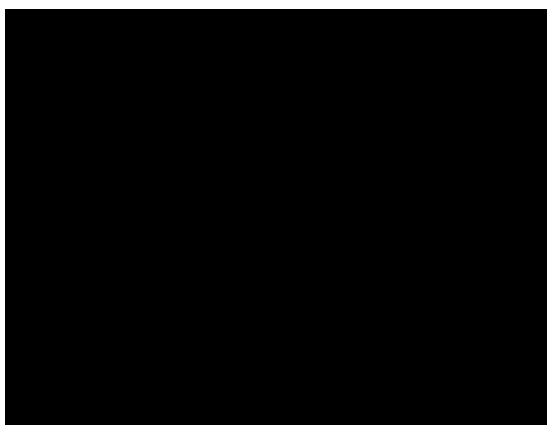


図49大和鞍（別名：青貝入和鞍骨）
（写真：葉翠馨）

品名：大和鞍（別名：青貝入和鞍骨） 322（雑美術工芸品-119）
員数：1背
所蔵：東京藝術大学大学美術館
時代：江戸時代 延宝4年(1676)
法量：
前輪—高263mm、馬挟300mm
後輪—高383mm、馬挟360mm
居木—総長383mm、乗間305mm
刻書：「延寶四年 卯月日」

品質形状

木製黒漆塗に螺鈿と金蒔絵で加飾された鞍。前輪・後輪の海部分は黒漆塗りにし、磯部分と居木の外面には鮑の青貝(薄貝)で文様をつけ、貝と貝の間に金蒔絵の線（図50）で縁取りしている。前輪・後輪が居木と組み合う部分（図51）にも金消し

粉地になっている。青貝部分は、正方形、長方形、三角形などの幾何学形をぎっしりならべた意匠となつてはいるが、黒漆塗り部分が隣にあることで、貝の色調は賑やかなというよりはむしろ落ち着いた印象を与えている。鞍橋の裏側に彫り銘がある。前輪に向かって左の居木裏に延宝4年（1676）の年号(図52)、前輪の右側・後輪の左側である切組み部分に花押(図53)が刻まれている。現存している江戸時代の文献資料と考古資料とを照合して調べたが、本「大和鞍」の彫り銘と花押が見当たらず、鞍打ち師の名前、所有者や鞍の背景などは特定できない。

前輪の高さの4分の1が山形の高さにあたり(図54)、山形部分の占める割合が多く、その分素地が薄くなっている。山形の隅より若干下がった位置に手形を設ける。山形の部分が大きい為、後輪の湾曲が浅くなり、全体に軽快、派手な印象を与える。室町・桃山時代以降によく見られる水干鞍の形式であり、幕末までも続いている近世の鞍の様式を示す。

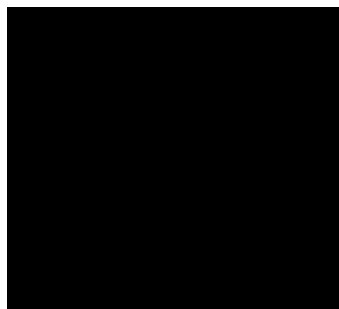


図50金蒔絵の線で縁取り

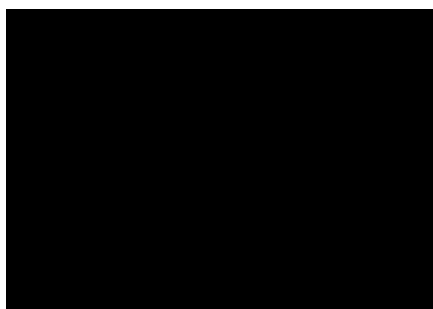


図51前輪が居木と組み合う部分
(写真：葉翠馨)



図52年号の彫り銘



図53花押の彫り銘

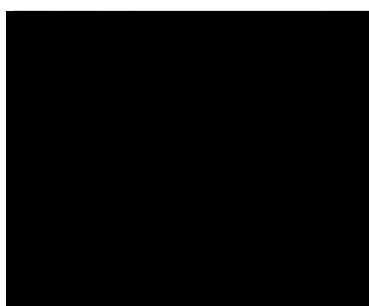


図54前輪の高さの4分の1が山形の

修理前の状態

本作品には外箱がなく、全体に埃や汚れが付着していた。紫外線や経年変化による漆塗膜と螺鈿の劣化があった。前輪・後輪と居木の組み上げは麻紐で簡易に結ばれていたのので後世による組み直しがされたことは明らかであった。

前輪・後輪の全体に青貝螺鈿はほぼ全体的に漆面からの剥離が激しく、高く浮き上がる部分が随所に見られ亀裂が入っているものが多かった。貝自体は劣化し崩れやすい非常に不安定な状態であった。剥落箇所が多くみとめられ、剥落片がすでに失われてしまった部分もあった。前輪・後輪と居木の切り組み部分にも、金消し粉地が施されているが、擦れが原因で金色に傷みが入った所があった。前輪の海の部分にシールと思われる跡があった。当初の螺鈿との色調の差から後補した螺鈿が見受けられた。わずかな移動にも剥落の危険が伴い、展示に耐える状況ではなかった。

(図55、56、57、58) 左居木と右居木には、螺鈿の浮き部分と欠損の箇所があったが、前輪・後輪の状態よりかなり少なく、素地は状態が良いと見受けられた。(図59、図60) また、すでに剥落した螺鈿を保管している封筒など、鞍の別名と記録番号が書かれている紙2枚が付属していた。

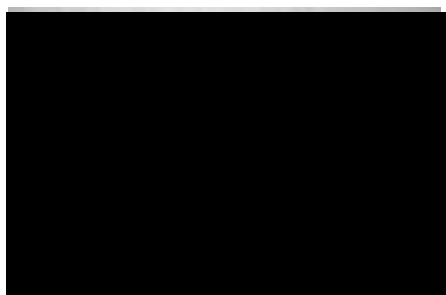


図55修理前の前輪表面の状態
(写真：葉翠馨)

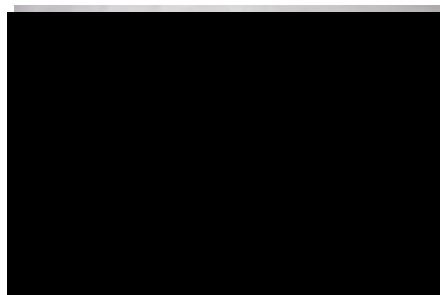


図56修理前の前輪裏の状態
(写真：葉翠馨)

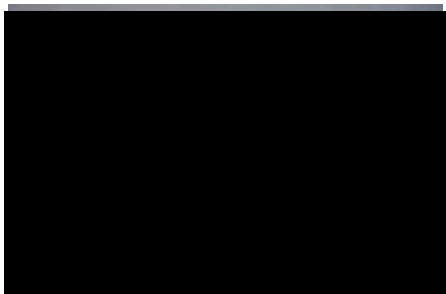


図57修理前の後輪表面の状態
(写真：葉翠馨)

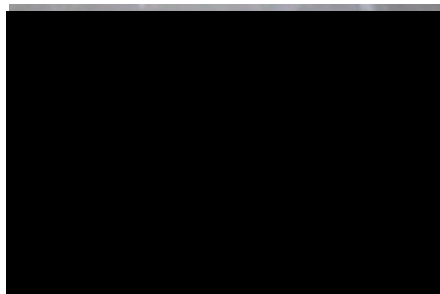


図58修理前の後輪裏の状態
(写真：葉翠馨)

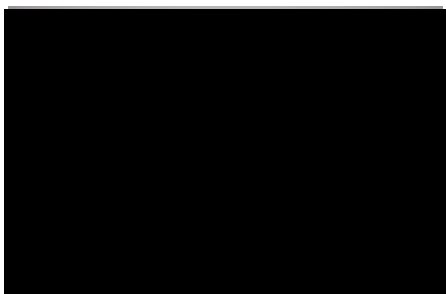


図59修理前の左居木表面の状態
(写真：葉翠馨)

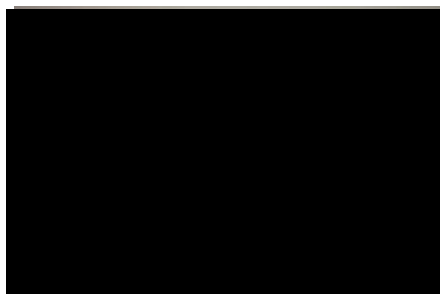


図60修理前の右居木表面の状態
(写真：葉翠馨)

修理方針

修理前に以下のとおり修理方針をたて、これにしたがって修理を進めた。保存修理を基本に行い、美術館内で移動に支障なく展示ができるようにすることを目的とする。修理材料には膠、漆、糊、和紙など伝統材料を使用する。鞍紐は一度取り外し、前輪、後輪、居木に分けてそれぞれの修理を進め、修理後に組み戻す。経年による汚れを無理のない程度に除去し、貝の欠失の後補は行わないこととする。修理前に別に保管されていた剥落した螺鈿はできるだけ元の位置に戻す。前輪の海にシールの跡はつやが目立っているのを、所蔵館担当者と協議した結果、周囲のつや調査をはかる。

第2節 修復工程

・調査記録

搬入の際に、鞍の状態を確認し、付属物も記録した。修復前に鞍全体と各部位の細部の写真撮影を行った。損傷の状況を観察調査し、損傷分布図を作成した。損傷原因を推察し、修復材料を選んだ。(図61、62、63、64)



図61搬入の時の状態
(写真：葉翠馨)



図62付属の名札
(写真：葉翠馨)



図63付属する螺鈿の残片
(写真：葉翠馨)



図64撮影する風景
(写真：葉翠馨)

・鞍解体

鞍の組み上げは麻紐の簡易な結びであったので、全体に不安定で、組み直しが必要であった。また、今後の修理作業においても、一度解体した方が、前輪・後輪と左右居木に分け、各部位毎の圧着作業がやり易くなると判断し解体することにした。解体の際の様子を撮影した。外した麻紐を保管した。(図65、66)



図65鞍を解体するときの様子

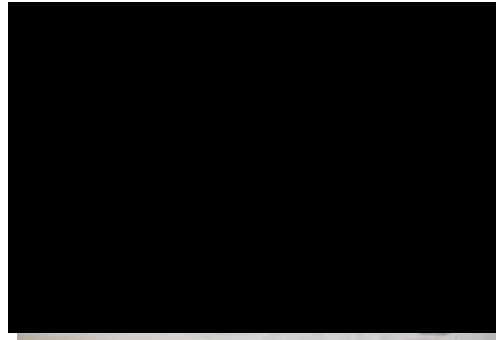


図66鞍解体した状態
(写真：葉翠馨)

・養生（仮止め）

本作品の表面に特に前輪・後輪の螺鈿部分と漆塗膜に多く剥離剥落が生じていたため、掃除の際に剥離した部分の損傷を拡大する恐れがあった。剥離した漆塗膜や螺鈿及び剥落の危険がある箇所小さく切った和紙を薄い糊で貼って仮止めし、養生を行った。(図67、68)

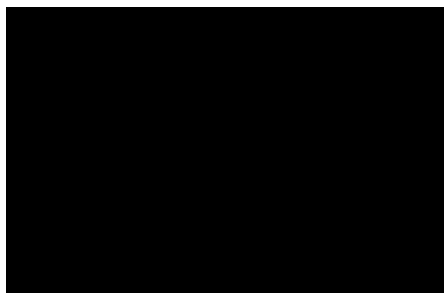


図67螺鈿の剥落状態の確認

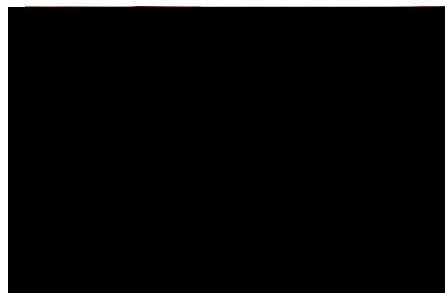


図68養生を行った

・掃除

全面を覆っている埃や糸くずは毛棒を使って払った後、綿棒や綿布で水拭きを行った。前輪・後輪は曲がり材を使用しているため、素地の歪みが強く、その影響を受け、螺鈿の剥離が進んで浮きが酷かったので、剥落か所に気をつけながら丁寧に汚

れを取りのぞいた。左右居木は表側のほとんど全体に螺鈿が貼られているので、表面全体（螺鈿部分）に水およびエタノール水溶液で丁寧に汚れを拭き取った。貝部分は、水分により、膨らみ壊れたり、弾けたりするおそれがあり、より注意を要した。（図69、70）

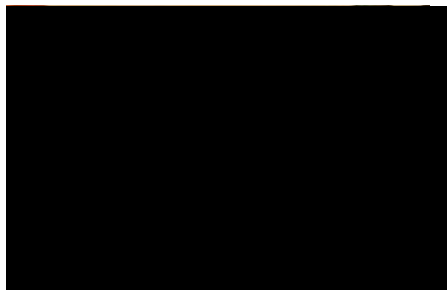


図69埃や糸くずは毛棒で払った

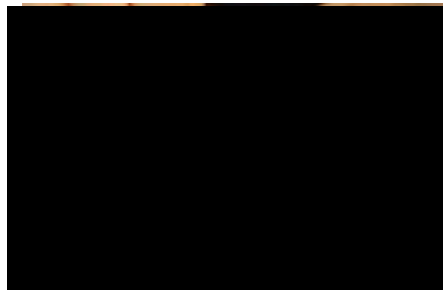


図70綿棒で螺鈿の表面に丁寧に汚れを取った

・剥落螺鈿の照合

現作品は鞍の前輪・後輪の海部分以外、ほぼ全面が螺鈿で加飾され、螺鈿は正方形、長方形、三角形などの幾何学図形が連続する文様であるため、剥落した螺鈿を本体の欠失箇所と照合するのが難航した。同じ幾何学図形をしていても大きさが異なっていたからである。剥落欠損部の形状、貝の色味、剥落した貝の厚さと欠損部周りの螺鈿の高さなどをもとに剥落片を戻す位置を決定した。（図71、72、73）

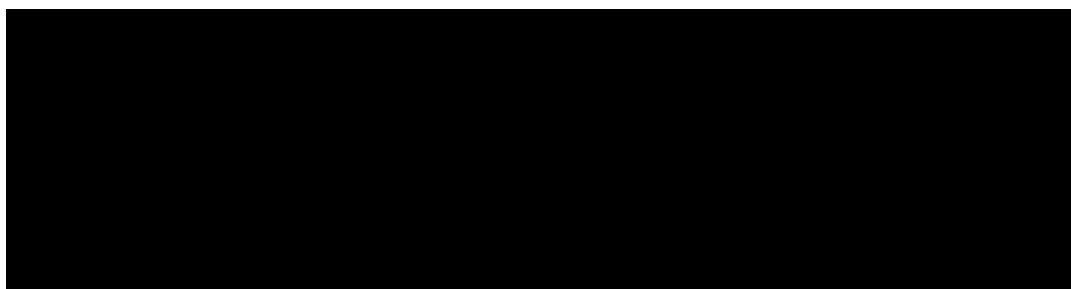


図71剥落した貝

図72元の位置に戻す

図73仮止め

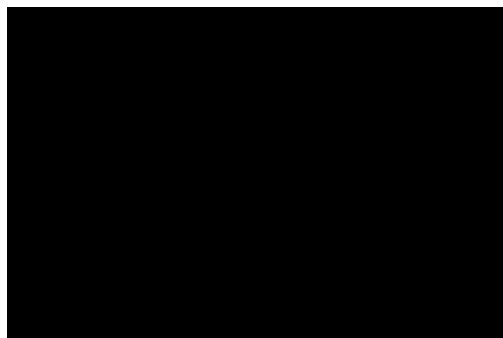
・螺鈿剥落止め

本作品を調査したところ、螺鈿の接着に漆が使われていないことがわかった。膠で貼られている螺鈿は漆で圧着すると、貝の色味が強くなるので、今回は、膠を使用することとした。接着力の強い三千本膠を用いた。水で調節しながら、浮いている螺鈿部分に含浸した後、余分な膠をぬるめのお湯で拭き取った。鞍の形が複雑であるため、圧着作業用にしんばり台を製作した。しんばり台は鞍より少し大きめに作った木枠で、本体のおさえ箇所と天板につっかえ棒（竹籤など）を渡し突っ張る

力で圧着するものである。また、鞍の形に合わせ、横には角棒をクリップで増やして、つかえ棒（竹籤など）でおさえ箇所を圧着した。

・漆固め

螺鈿以外の木地、漆塗部分の漆固めを行った。螺鈿部分に漆が染み込むと貝の色が変わってしまうので、はみ出さぬように注意して行った。



・麦漆含浸

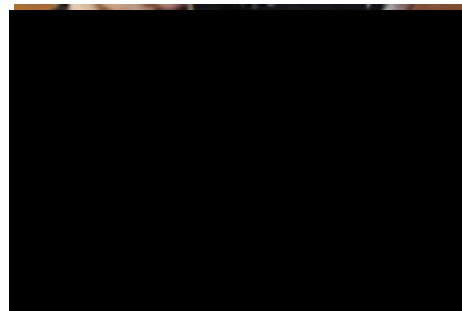
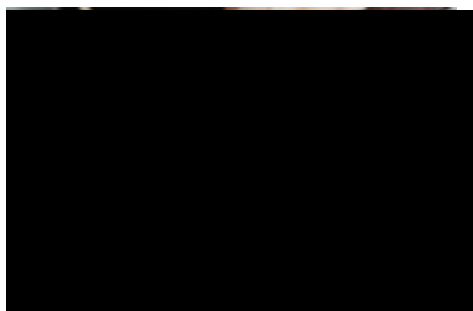
損傷部分に麦漆を含浸させ補強した。浮いている漆塗膜をおさえた。

・際錆

再圧着や含浸を施したあと。段差を緩和し手擦れをよくする為に際錆を施した。オリジナル塗膜の上に錆漆を残さないように注意して行った。

・組み上げ

紐の結び方を所蔵館担当者と協議しながら、当初の結び方に近い方法を割り出し、鞍橋が安定するようにしっかり組み上げた。



・修理記録

前輪・後輪・居木のそれぞれの修理が終了した時点で、修理前と同じ位置で修理後の写真撮影をし、修理箇所を明確にした。鞍橋を再び組み上げた状態で修理後の写真撮影をした。

第3節 まとめ

修理前は、全体に青貝螺鈿の剥離が激しく、わずかな移動にも展示にも耐えられない状況であったが、今回の修理は、現状維持の修理原則に従って螺鈿や金蒔絵の復元は行わなかったが、剥落した螺鈿をすべて元の位置に戻し、浮き上がった箇所も抑えたので、修理後は展示可能な状態を取り戻した。

初めて本作品を見たとき、螺鈿の劣化が大変ひどい状態であった。当初螺鈿の剥落原因として、紫外線や経年変化による劣化であると考えたが、前輪・後輪の螺鈿の浮き上がりは、螺鈿と下地の間に空隙が広がっており、普通の劣化の程度を超えていた。それ故一番の原因として、前輪・後輪の素地に曲がり材を用いていることによると推測した。中世から鞍の前輪・後輪の素地は硬い曲がり材を用いてきた。すでに乾燥した木材でも、環境温度・湿度の変化することで、反り・割れ・自然現象が起こる。今後鞍の保存方法を考え上では、曲がり材の狂いや収縮の問題を解決することが、鞍の劣化を抑えることにつながるであろう。

今回修理時に解体したことで、組んだままで分からなかった両輪の切先を隠れていた居木先の形態が明らかとなり、また、本作品では簡易な組み上げに得られて付いたが、紐と通し穴の配置を確認することができた。このことで復元に第五章で馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」の模造する工程については大変役に立ったということである。

第五章 馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」の模造

馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」（図74）の模造を行い、両輪と居木の美しい曲面構造の素地、漆塗、装飾、四緒手、紐での組み上げといった水干鞍全体の技法を理解することを目的とした。原物の実見調査及び文献調査から、当時使用されていたと推測される同じ材料、技法を可能な限り使用して、復元作業を行った。制作工程について記述する。

第1節 「烏彫木漆塗鞍」概要

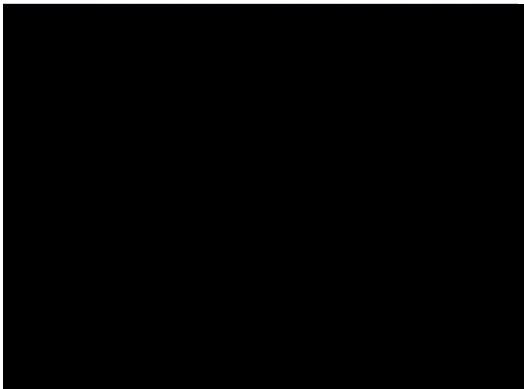


図74烏彫木漆塗鞍
（写真：馬と人を結ぶもの
-鞍の世界-）

- 品 名：烏彫木漆塗鞍
（からすぼりきうるしぬりくら（所有者の呼称のまま））
員 数：1 背
所 蔵：馬の博物館（神奈川県横浜市）
時 代：江戸時代
品 質：木製漆塗蒔絵
法 量（組み上げ時）：高 255mm、幅 366mm、奥行 355mm

品質形状

木製黒漆塗に高肉上げでレリーフ状の文様がつけられている鞍で、前輪・後輪の外側部分に各一羽の烏文様を配し、内側に烏の翼先が表から回り込んでいる構図となっており、鞍の加飾に烏を用いた大変珍しい意匠である。四緒手穴の際に金の蒔絵線で縁取りしてあり、前輪・後輪の外側と内側の部分と居木の表面には、銀平目地が施されている。鞍表面には銘が無いが、前輪の居木先が組み込まれ見えなくなる箇所に墨で書かれた花押がある（図75）。現存している江戸時代の文献資料と考古資料とを照合して、調べたところ、「烏彫木漆

塗鞍」の墨書と江戸時代にある類似ものが見当たらず、製作者の名前を特定するのは至っていない。

鞍橋は、前輪・後輪に海と磯の段差をつけない（図76）、いわゆる海無鞍である。前輪の高さの4分の一が山形の高さとなり、前輪の両肩（山形の隅より若干下）に二段の手形を設け、二枚居木である。鞍橋の構造には、室町・桃山時代以降よく見られる水干鞍の形式の特徴があると思われる。馬の博物館の図録によると制作年代は江戸時代とされる。作者や制作地や素地の種類などについては不明である。

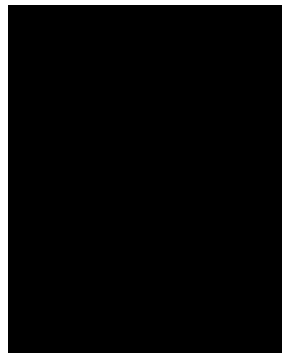


図75花押

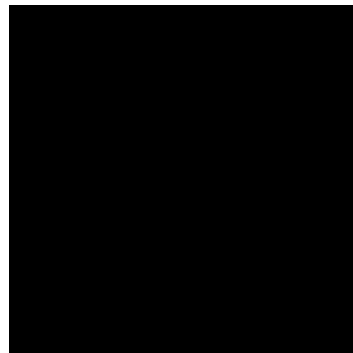


図76後輪表面の見られる海無鞍の形

本体調査及び考察

本作品の鞍橋は、室町・桃山時代からよく見られる水干鞍の流れを汲みつつ幕末まで流行した近世鞍の典型的な形を示している。海無鞍は江戸時代によってから、よく見られるようになった鞍の形式であるため、江戸時代の水干鞍であることと推定できる。「日本馬具大鑑 近世」に、「海無鞍 前輪と後輪の表面に海と磯の区別がなく、平に仕上げられた鞍という。海有鞍と同じ規格化された形態をもって、幕末まで造られ続ける」と記載されている⁹⁶。海無鞍の初期作例としては、愛知県の菟足神社が所蔵している唐草螺鈿鞍があげられるが、他にも作例が多数ある。

前輪・後輪は表裏両面とも漆塗りが施され、どのような木材が使われているのか判別しにくい。前輪・後輪の切り組部分と居木の裏面には摺り漆を施している。破損部分の下地が出ているところを見ると、前輪・後輪ともに布着せがなく、居木裏の一部と居木先部分のみに麻布を貼っている。居木の裏以外は鞍全体に黒漆を塗り込み、銀平目粉を蒔いている。四緒手穴の際に金の蒔絵線で縁取りをしている（図77）。烏の文様は鞍の前輪・後輪の磯と鰐口の部分だけに施している（図78）。前輪・後輪の磯部分から鰐口に飛んでいる烏をそれぞれ

⁹⁶ 同註72

れ一羽配し、前輪・後輪の裏部分と鰐口にも鳥の羽が見られる。鳥文様は錆漆で高上げをして黒漆塗りで仕上げているが、損傷箇所から赤味の強い茶色の錆下地を付けていることがわかる（図79）。鳥の目、口、体、尾など、1本1本の羽などはさらに高く錆漆で盛り上げ、鳥の立体感を出している。体と尾の羽の細部と口部分には錆び上げ後に刻線と細い黒漆の描線で毛打ちされている（図80）。

鞍の加飾は、前輪・後輪にそれぞれ一羽飛んでいる鳥の意匠表現が特徴的である。このような鳥を文様として加飾するのは、他の鞍にはほとんど見られない。実は、鳥文様は日本に古くから伝わる意匠の中でも特にめずらしい。現代では忌み嫌われる鳥であるが、鳥は古来、吉兆を示すようである。古代中国では鳥は太陽の象徴とされ、日本にもその思想が伝わっており、日本神話において神武天皇の東征の際には、八咫鳥（3本足のカラス）が熊野国から大和国に入る道案内をしたという神話がある。その後、八咫鳥は導きの神として信仰されているが、古くより熊野の雑賀党鈴木氏では家紋として八咫鳥や鳥が使用されている。

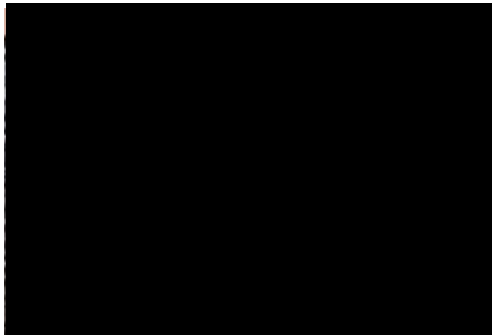


図77四緒手穴の際に金の蒔絵線

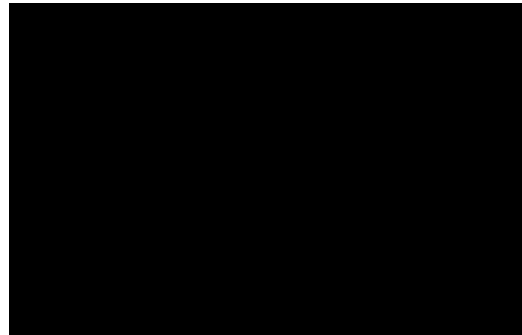


図78鰐口の部分の鳥の羽（写真：葉翠馨）



図79赤味の強い茶色の錆下地（写真：葉翠馨）

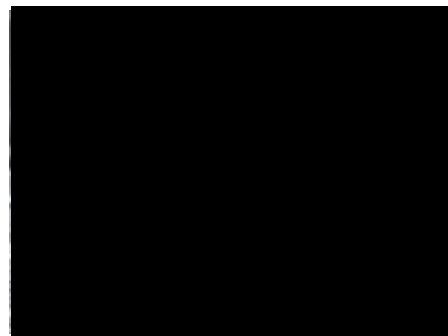


図80口の部分の毛打ち（写真：葉翠馨）

今回調査中、鞍を解体の機会を得、詳細なる採寸を行うことができた。

鞍解体後(実際測った寸法)

mm	山高	縁厚	鰐口	鰐口厚	鰐口深	馬挟	手先	総高
前輪	71	12	76	31	30	297	45	251
後輪	70	10	78	30	27	366	45	280
mm	長	前幅	中幅	後幅	力革穴長・幅			
居木	×	120	89	135	×	×		

第2節 復元制作工程

科学的調査及び文献歴史調査により、可能な限り江戸時代使用されていたと推測される同じ材料、技法を使用し、復元工程について記述していきたいと思う。

素地

前輪・後輪の素地については、『正倉院宝物の木材材質調査報告』に「重量のかかる居木は強靱なカシで、両輪は緻密で美しいクロカキである。前輪・後輪は同質の材で、ムクノキ、カキ、ヤマグワが用いられている。」⁹⁷と書かれている。正倉院に納めている木製鞍を見ると、前輪・後輪の木目は曲がっている様子が見られる。「古今要覧稿」に載せられている「白鞍」と「木地螺鈿鞍」の絵も、前輪の木目を曲がっている様子を詳しく表わしている。

居木の素地については、中里壽克の『鹿宮神宮蔵黒漆居木の修復処置』⁹⁸には「……古来居木にはみずき、さわぐるみ、ねむのきを用いたといい、又柚木も用いられたと云う。鞍は強く乗るときしみて火を生ずることがあるが、……近年になつてはブナ材が主に用いられたようである。」という記述がある。

⁹⁷ 貴島恒夫、嶋倉巳三郎、林昭三、『正倉院宝物の木材材質調査報告』、正倉院紀要第3号、正倉院事務所、1981年、p5

⁹⁸ 中里壽克、『鹿宮神宮蔵黒漆居木の修復処置』（受託研究報告第35号）、保存科学第14号、東京文化財研究所：保存修復科学センター、p77-86、1974年

木目観察のため当該鞍の代わりに同時代の別の鞍を蛍光X線分析装置で分析した。前輪（図81）と後輪（図82）をよく観察すると、木目は曲がっていることをはっきり見られるため、鞍の前輪・後輪は曲り材を使われていることが分かった。左右居木の木目を観察すると、左居木と右居木の木目が異なっており、左右別の樹種であることが明らかであった。左居木の木目は右居木の木目より幅が大きく、左右の居木に使用している樹種は桐材を思わせる木肌でしかも重量をくらべると軽く（図83、84）、おそらく居木のどちらかは後補されたものと推測される。



図81前輪（写真：X線透視装置より）



図82後輪（写真：X線透視装置より）



図83左居木（写真：X線透視装置より）



図84右居木（写真：X線透視装置より）

これまで調べてきた文献や資料から、鞍の素地は、古くより硬い木の曲がり材を使用してきたと推測し、復元素材も調査の中で上がった樹種からぶことにした。使われてきたと記録されているカシの材質は、粘りがあって加工しにくく、天然乾燥もしにくいといった難点がある。しかも、カシの曲がり材は現在ほとんど使われておらず、手に入らない現状である。今回の模作では、鞍強度のことを考慮して、前輪と後輪と馬の間に起こる引っ張る力や衝撃をやわらげられると考えられる上、ケヤキの材質は、強度（硬い、摩耗に強い）、耐久性（長年腐朽しない）の特徴がありながら 扱いやすく、鞍の素地材料として十分耐えられる強度をもつため、前輪・後輪の材料としてケヤキの曲り材（二股部）を使用した。

左右居木の材料については、上記で述べた正倉院の木製鞍資料（平安時代）、中里壽克の『鹿宮神宮蔵黒漆居木の修復処置』の論文、蛍光X線分析装置で分析した江戸時代の鞍により、ミズキ、キリ、サワクルミ、ネム、カシなどがよく使われている居木の材料がわかった。また、各地の宗教や儀式により、長野県や新潟県などの地方では棟上げ時の火除けの儀式にミズキが使われ、東北から中部地方にかけて正月の若木迎えにもミズキの小枝を用い、アイヌ族はミズキで作られた木幣を立て、

海神に祈ることである。そして、今回模造で居木の材料については、宗教や儀式の視点で見ると、ミズキが縁起が良い樹種であり、木質の素性がよく、成形し易く、柔らかい特徴を持つため、前輪・後輪の間に緩衝材として、ミズキを使用することにした。

今回の素地の工程は、加工順序は下の通りである。歴史文献、博物館の調査で割り出した鞍の製作法と調査写真をもとに、筆者所有の同年時代で同様構造の鞍を、実測した寸法などを参考にしながら、先ず前輪・後輪の型紙を作って木地にあてがい、割れにくい部分の木目を選んだ。素地を作るときは鋸、平鉋、四方鉋、平鑿、固定台座などを使用した。

鋸で木取りを行った。木取った材と実寸大の型紙を重ねて、一寸の叩き鑿で鞍の外観を彫り進めた、前輪・後輪の表面に磯（高）と海（低）の起伏を設けない平面な海無鞍であるため、気をつけて滑らかな曲面を削り出し、前輪・後輪の形を成形して行った。前輪・後輪と両居木の距離を決めることや鞍全体を固定するため台座(治具)を制作した。完成した治具を使用しながら、居木は前輪・後輪に合わせて、左右居木の形を取り過ぎないように、気をつけて削り出した。(図85、86、87、88)



図85丸太のミズキの皮を取る



図86前輪の形を削りだした



図87居木の形を削り出している



図88前輪・後輪と左右居木を組み
合わせ作業

漆下地

・刻苧掻い

「刻苧^{こくそ}」は、「木屎」とも書く。古くより、漆職人や仏師によく使われてきた充填材の役割をするものである。刻苧は使用目的によって用いる材料や漆の割合などが異なる。漆工芸では素地の合わせ目・損傷部分などに刻苧/木屎漆（糊漆と木粉や布繊維とを混ぜて練ったもの）を、ヘラ等で穴埋めして平らにし、傷を補修するなど下地処理として用いる。仏像彫刻では木地の穴埋めに加え乾漆の仏像などの細部の肉付けに用いられる。

今回の鞍の模作では、漆下地を施す前にケヤキとミズキの合わせ目・損傷部と虫食い跡を埋める為、刻苧掻いを行った。糊漆に用いる糊は麦、米、飯などから作られるが、硬練りがしやすいので、続飯^{そくい}（飯粒を練った物）を使用して刻苧を作った。手元にある同時代の鞍を顕微鏡で観察すると、刻苧の部分は麻の繊維が見られないため、今回の復元には麻の繊維を入れないこととした。居木はミズキで作ったが、虫食いの部分がひどいので、刻苧の前に、穴が深いところは同樹種の木を埋めて、膠で抑えた。そして、続飯と漆を1：1の割合で混合し、小麦粉を少し入れ、木粉（前輪・後輪にケヤキの木粉、左右居木にミズキの木粉）をさらに1：1の割合で混ぜた刻苧を施した。（図89、90）



図89居木は虫食い箇所は木と膠で埋める。



図90虫食い箇所は刻苧掻いする。

・木地固め

前輪・後輪、両居木の全体に 数回繰りし生正味漆を塗って乾かし、素地に十分吸い込ませ、木地固めを行った。（図91、92）



図91木地固めした前輪



図92鞍全体を木地固めした。

・穴あけ

手元にある同時代の黒塗鞍を解体し、水干鞍特有の組穴の位置を確認しながら前輪・後輪と居木の嵌まる場所に 組み合わせを確認しながら、ドリルで斜めに穴を開けた。まず居木の切先の部分と前輪・後輪の四緒手をかける穴を開けて、徐々に開け進めた。(図93、94)



図93後輪の穴を開けている



図94居木の穴を開けた

・布着せ

居木の切裏にある穴部分に麦漆(水練り小麦粉+正生味(若干多め)+糊)を使用し、麻布で補強した。

麦漆は、米糊漆と比べ粘着力が強いので、漆工品の保存修復に接着剤として使われている。今回、麦糊ではなく米糊を使って布貼りをしたのは居木は人が座す所で、馬の背で擦れることを考え、原物の鞍にも強い布貼りが施されていたであろうと判断したからである。乾きの利便を考えて僅かな米糊を加えた。(図95、96)



図95烏彫木漆塗鞍の布着せ



図96今回鞍模作の布着せ

・目止め

今回使用したケヤキの曲がり材は、表面の木目の導管が深く、漆塗り工程に入っても木目が深く埋まりにくいことや将来下地がやせて木目が現れる可能性があると考えられた。そこで下地を施す前に先に前輪・後輪、両居木に錆漆（砥の粉+生正味+糊(少)）で目止めをした。（図97、98）



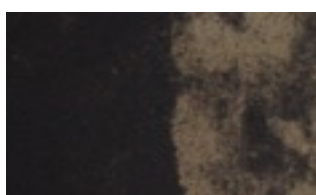
図97前輪の木目は導管が深い



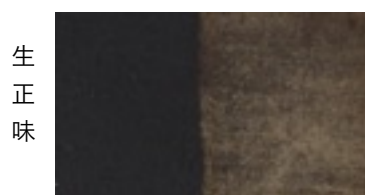
図98前輪を目止めした

・蒔き地

調査写真を見ると、損傷箇所には錆下地が見受けられるが、鞍と馬の間に生じる引っ張る力や衝撃を強く受けるため、錆下地だけでは、弱すぎるので、おそらくは原品の錆下地は何らかの下地の上に重ねられていると推察できた。今回使用しているケヤキは導管がかなり深いので、錆下地の前に蒔き地を行い、しっかりした下地を作る事にした。当時の流通状況や産地を考え、汎用されていたと思われる京都山科地の粉を用いて、篩で#100～#150、#150～#180、#180より細かい粉にふるい分けた。それぞれの粗さの蒔き地サンプルを製作し、上に施す錆漆の乗り具合を比べ、最終的に#150～#180の地の粉と呂瀬漆を使用することにした。（図99、100）



#100～#150



#150～#180

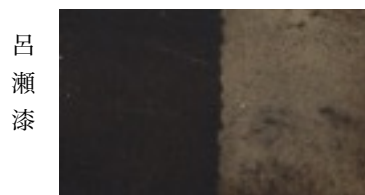


図99蒔き地の実験サンプル



図100蒔き地をした。

・ 錆付け

蒔き地工程終了後、前輪・後輪の裏と居木の表に2回錆漆を付け、表面を砥石で研いで平滑にした後、漆固めをした。

塗り及び銀平目地蒔絵

原作品鞍の平目地の部分に、蛍光X線による金属分析を試みることはかなわなかったが、調査の時に撮った記録写真（図101）を同寸大にして観察すると、平目粉は大中小大きさが混ざっていることが分かった。おそらく「大一」（#9）、「小三」（#5）、「先一」（#4）、「先二」（#3）くらい号数の銀平目粉が使われていると推測され、記録写真を見ながら手板（試験用の小板）にサンプルを作り、粗さを現代の粉のサイズに置き変えて使用平目粉を決めた。

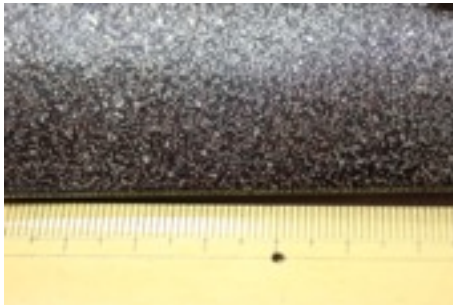


図101 居木の平目地の記録写真

加飾－高上げ法

今回の模作のため、前輪・後輪表面に加飾された鳥文様の技法を検証したいと思う。鳥のモチーフは、かなり盛り上げられ、全体の立体感が強い、鳥の目、口、羽のなどは高く盛り上げであり、鳥文様は黒漆塗りで仕上げられている。また、鳥の模様は、通常の高蒔絵で高上げする時と同様に高上げしていると考えられるが、本体を調査した際、高上漆の使用は見られず呂色漆のみを使用していると分かった。すなわち鳥は高上げ後仕上げの呂色漆を描き塗り、乾いてから仕上げ研ぎをし、呂色磨きで仕上げたものである。

高蒔絵とは漆で肉を盛り上げた上に平蒔絵を施す蒔絵の一技法である。鎌倉時代から行われ、室町時代には、生漆に砥粉を混ぜた錆で盛り上げる錆上げ高蒔絵が発達した。1966年文化庁編集の「無形文化財記録工芸技術編4 蒔絵」の中には、

「呂色仕上をした塗面に置目を取り、その部分に漆を繰り返して塗り厚めに塗り盛り上げる「漆上げ高蒔絵」。」

「蒔絵を施す部分を塗った漆の上に炭粉を蒔いてさらに盛り上げる「炭粉上げ高蒔絵」。

「炭粉上げの場合と異なり、焼錫粉を蒔いて盛り上げる「焼錫粉上げ高蒔絵」。」
「水練りした砥粉に生漆を混ぜた錆漆で盛り上げる「錆上げ高蒔絵」などがある。」

高野松山の高蒔絵の技法について以上の通り書かれている。要約すると、高く盛り上げる技法にはいくつかある。

沢口悟一の著書「日本漆工の研究」⁹⁹（1966年）の中にも、「黒蒔絵」と「錆上げ高蒔絵」の技法の説明がある。但し、別々の技法として、
「黒蒔絵 彩漆を用いず黒漆のみで高蒔絵の如く描きたるものである」、
「錆上げ高蒔絵 普通の高蒔絵よりも一層高く描くために錆にて肉を盛り上げるものである」と記載されている。

文化庁編集の「無形文化財記録工芸技術編4蒔絵」の中で「黒蒔絵」の工程は「炭上げ高蒔絵と同様に、高上げまでの工程を行う（この場合は高上漆のかわりに呂色漆を用いる）。最後に仕上げの呂色漆を描き塗りして、乾いてから椿の針炭で仕上げ研ぎをし、呂色に仕上げたものである」と書かれている。

今回の鳥の加飾の黒蒔絵はかなり高肉上げされているものであるが模作にあたって、黒蒔絵の工程をこの表で比較し、適した工程を選び出し、以下の表の通り、錆上げ、漆塗り及び平目地の工程を行った。



図102 鳥文様金具着せ



図103 鳥の部分の炭で研ぐ



図104 銀の平目粉を蒔く

⁹⁹沢口悟一、『日本漆工の研究』、美術出版社、389p、1966年

順番	工程名称	内容
1	金貝着せ	平日地仕立てられた前輪後輪に錫金貝を姫糊で2枚を重ねて貼った。(図102)
2	置目	前輪・後輪に烏文様を置目した。
3	金貝切抜き	烏文様の置目に従い印刀で錫金貝を切り、輪郭内の金貝を取り除いた。
4	錆付け	金貝を取り取った部分に錆漆で平らに付けた。
5	錆研ぎ	砥石で水をつけて錆と金貝の厚さが一致するまで研いだ。
6	高上げ(数回)	烏文様は下図を描いて、そして下図に従い、さらに錆付けて、漆固めて、盛り上がるまでに数回繰り返した。
7	錆彫り	烏文様の目、口、羽、尾などの形を彫刻刀で彫って、表面を研いだ。
8	下・中塗り	前輪・後輪全体(切先と馬膚除く)と両居木の表面に日本産黒呂色漆で下塗りをし、炭研ぎ、中塗り、炭研ぎまで進めた。(図103)
9	粉蒔き	前輪・後輪と両居木の平日地部分に下付けとして黒呂色漆で地塗りをし、粗さの異なる平日粉が全体に混在するように#9(10%)、#5(30%)、#4(40%)、#3号数(20%)の順番に蒔いた。(図104)
10	粉固め(2回)	粉蒔いた部分に木地呂漆を薄く塗った。
11	乾かす	一週間置いて十分に乾かした。
12	塗り込み	使用している#9、#5、#4、#3の平日粉の粒子が、大小混ざっているため、まんべんなく塗り込めるよう、上塗りは木地呂漆を2回塗込んだ。
13	塗り研ぎ	炭で平日粉を研ぎ出した。
14	炭粉上げ(2回)	烏文様の体にある羽根の細かい部分は炭粉上げを行った。
15	上塗り(烏文様)	中塗り、炭研いだ烏文様の部分に黒呂色漆で上塗りをした。
16	漆描き	上塗りをし、烏文様の口にある部分を黒漆線描きした。
17	呂色仕上げ	鞍全体に呂色仕上げした。

第3節 鞍の組み立て及び麻紐の結縛法

江戸時代に鞍師職人が途絶えてしまったため、今日では鞍の製作技法は分からなくなっている。現存する水干鞍、ほとんどの鞍は、何度も清掃や解体修理を経てきたことは明らかで、実際の原型結び例が僅少であるといえる。鞍に関する文献資料や現存している実例を調査することによって、鞍組立方法と緒の結び手順を解明していきたいと考えている。現在までに調べている限り鞍の緒の結びに関する歴史文献は、わずかに「古今要覧稿」の中唐鞍の結び図、江戸時代下野国黒羽藩の藩主である大関増業が編述した兵学書の「止戈枢要」の鞍の緒の結び図（図105、106）と同じ時代の有職故実である「馬具図式」（作者不明）（図107）の緒の結び図及び松平定信の『集古十種』の唐鞍の緒の結び図が見られるぐらいである。しかも、いずれも緒の結びの手順工程ではなく、結びの図のみである。この結び図によって鞍の緒の結びに関する資料分析を行った。

『古今要覧稿』と『集古十種』の中は東大寺八幡宮にある鎌倉時代の唐鞍（図108、図109）の結びが詳しく描かれ、「馬具大鑑」の唐鞍結びの写真（図110）と比べると、ほぼ一致することがわかり、使用している紐は麻紐ではなく、革紐であった。鎌倉時代からこの唐鞍は東大寺八幡宮の祭礼の際に威儀馬の馬具としても使用され、この唐鞍の結び方は遅くとも鎌倉時代から行われていたと推測される。しかし、長期に渡り同じ紐を維持するのは難しいので、資料写真の結びは確認はできないが、交換された可能性も否めない。

鞍の縛り方の名目の図



(図105：葉翠馨作)

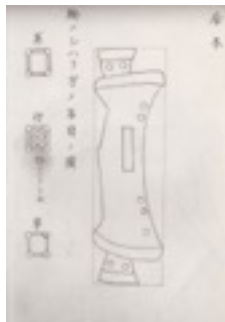


図106鞍の結び図
(図：止戈枢要)



図107鞍の結び図
(図：馬具図式)



図108 唐鞍の結び図
(画像：古今要覧稿)

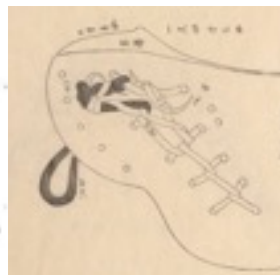


図109 唐鞍の結び図
(画像：集古十種)



図110 唐鞍の結び
(写真：馬具大鑑4近世)

江戸時代の「止戈枢要」に描かれた結び図を見ると、日本鞍の結びは「止戈枢要」の図では、「草」、「行」、「真」三つの結び形があることがわかる。まず、「草」の結びは、一番簡易な縛り方で、「行」の結は「草」よりもっと丈夫な結びであり、最後の「真」の結びは、「行」の結びを基本にして真ん中で紐が変化するやり方だと見てとれる。また、手元にある同時代の黒塗鞍（図111）の観察に加え、鞍収集家、菅野茂雄の収蔵品を特別に調査させていただき、所蔵している多数の江戸時代の鞍（図112、図113、図114）を考察し、江戸時代にある本来の結びを見つけることができた。また「馬具大鑑」の近世鞍の写真から数種類の結び例（図115、図116、図117、図118）も見つけた。それら史料の結び図や調査写真を照合すると、「止戈枢要」の図の三つの結び方は江戸時代によく使われた鞍の縛り方であることは間違いないと確信できた。また「馬具図式」に鞍の緒の結び図は「行」の結びとよく似ているが、江戸時代の有職故実家にも記録されていることは、当時にこういう結び方がよく使われていることを推測できる。しかし、江戸時代の鞍の結び形がわかったでも、このような結びはいつ頃から始まったか特定できない。中世鞍と近世鞍の形は、構造に少しの違いはあるが穴の数と位置は概ね同じである。そうなると、結びは中世鞍（平安時代後期～室町時代後期）からずっと同じやり方で鞍を縛り続けて来たと考えられる。



図111 手元の鞍の結び

図112

図113

図114

菅野茂雄の収蔵品である江戸時代鞍の結び

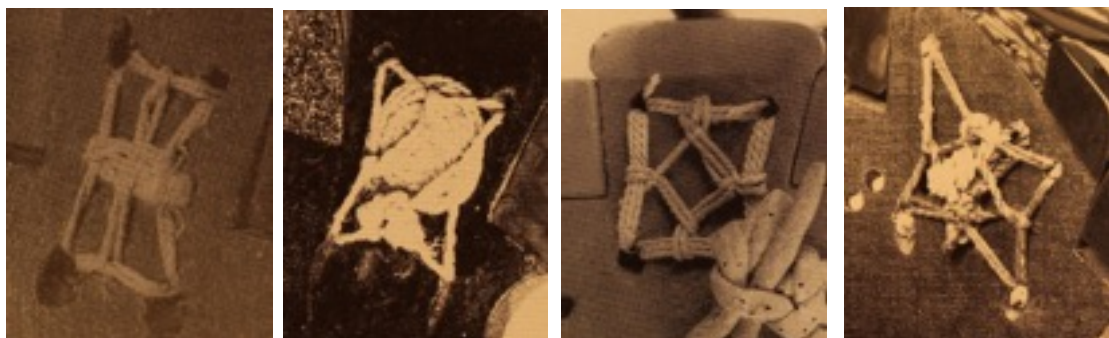


図115

図116

図117

図118

近世鞍の結び例「馬具大鑑」により

今まで調査した数々の結び図を観察すると、古くより日本鞍の組立方法を見ていくと、紐の材質は鹿革紐の場合も、麻紐の場合があるようだ。特に近世鞍の結びでは、麻紐を用いていることが多く見られる。現在文化財保存修復では結び紐は素地を傷つけないように革紐を使用することが一般的であるが、現存している近世鞍の資料写真を調査していったところ、本来の結びは麻紐を使用するらしいことが分かった。今回の「烏彫木漆塗鞍」復元模作においては、麻紐による結縛法を試みた。

本番の組み上げの前に、史料の結び図と調査写真を見ながら、いくつかの縛り方を試行した（図119、図120、図121）。試行した結びは、資料写真と比べると、ほぼ同じように見られるが、麻紐の材質に、若干違和感が出てきた。手元にある黒漆鞍（江戸時代）から外した麻紐（図122）は、現在の麻紐より細く、繊維も少ない感じがし、麻紐と穴の間には和紙のようなもの（図123）が詰めている。

鞍の結縛法に関する文献以外にもさらに詳細な縛り方の分析を行うため、鞍の結びの実例の調査を実施した。現存する結縛箇所を参考しつつも、組み上げると一部の穴が木地に隠れてしまうので、隠れた部分の麻紐の結縛方法を想定する必要がある。解明の手がかりとなったのは麻紐を何本も重ねて結縛している部分である。図版と同じように両輪と居木を麻紐で固定したところ、この方法が鞍全体に強度を与え、馬への装着の密着感と安定感を得る事ができると確信した。従って、今回の模作にはこの麻紐結縛法を採用することにした。



図119



図120



図121

近世鞍の縛り方を試作した（写真：葉翠馨）



図122鞍結びの麻紐（写真：葉翠馨）



図123穴と麻紐の間の和紙（写真：葉翠馨）

結論

日本の工芸技術は、世界中に高い評価を受けている。その中に漆工芸は独特な加飾法に高い技術による水準の高い漆工品が多く作られ、さらに高く評価された。本稿の「第3節 水干鞍の装飾について」に

「江戸時代に将軍や大名は漆工芸を推奨したため、当時の漆職人たちは漆技術は発達を見せ、高蒔絵、研出蒔絵、肉合研出蒔絵などの蒔絵技法が精巧無比の極致に達した。」と述べた。江戸時代に将軍や大名などは漆工芸技術を競わせ、漆工芸を奨励し、世界の人々を魅了するほどの漆工品が生まれた。よく見られる漆工品は、宗教用具、家具、建具、調度品、椀、盆、皿類などの生活用品である。しかし、指し物、挽き物以外にも造形的に興味深いものがあるのか、もっと知りたいという気持ちが強かった。

最初、歴史文献などを探す時に、「絵巻物」の一つである「戦記絵巻」を惹きつけられた。平安時代の末期には、武士が台頭し、武家の勢力を拡大するため、いくさも増えている。その武士の社会を反映した「戦記絵巻」は流行し始め、当時合戦の仕方や武器・武具などの記録としても多く描かれた。南北朝時代（1347年）の飛騨守惟久が描かれた「後三年合戦絵詞」と江戸時代の「一ノ谷合戦図屏風」の中に、多くの馬が登場することが気付いた。その戦闘に用いられた馬には馬具が装備され、特に鞍のようなものが見られ、また「一ノ谷合戦図屏風」は、海の中に乗り入られた馬は載せられた鞍のようなものは綺麗な加飾加工を施すことが注目され、大和鞍は漆工品であることが推測している（図124、図125）。そのきっかけは、その鞍のようなものの正体を見極めたいという思いがあった。



図124 後三年合戦絵詞（南北朝時代）
（写真：東京国立博物館）



図125 一ノ谷合戦図屏風（江戸時代）
（写真：馬の博物館）

そのあとに、漆工品と馬具について手をつけた。様々な漆工品、武具・馬具の図録や資料を調べ始め、馬具の一部である大和鞍のこともたんだん認識し、大和鞍は漆工品であることも確認した。

本稿の「第二章 大和鞍の概要の第3節 大和鞍の流れ」に述べた近世の水干鞍の構造は、西洋鞍には見られない特殊な形をしている。前輪・後輪と左右居木しずわの4枚の木を組んでいって、優雅な曲線造形の組み合わせが、魅力的であることとこの国に

独特の美学が感じられるため、水干鞍の伝統技法は充分研究に値すると思っている。

本稿では、まず武具と馬具の軌跡をたどり、その後、江戸時代以降の武器・馬具に関する有職故実の研究文献と軍陣鞍から水干鞍に移行する時期の史料を中心に水干鞍に関する論究を行った。水干鞍に関しては、馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」の再現制作工程を振り返り、現存する同じ江戸時代の水干鞍の素地をX線撮影によって科学分析した。また、近世の鞍と日本独創の漆加飾技術や鞍の意匠の変遷や鞍の組みにおける結ぶ技法の変化などを調査し、それらの時代別の比較や特徴づけを試みた。可能な限り当時使用されていたと推測されるものに現時点で再現可能な製作技術や素材を用い、水干鞍を再現制作し、新たな知見が得られた。

再現制作を通して、本来鞍の木地は檜、桑、黒柿などの堅い木材が用いられることが多く、特に鞍の両輪の部分は檜の大きな根曲がり材が使用されていることが実証された。しかし、現在ではそういった堅牢な木材が手に入らず、当時と同じような材料で作ることは困難であった。そのため、ケヤキの曲がり材で代用することになった。水干鞍の居木はいずれも二枚で、前輪と後輪の下面に設けた切り込みで組み合わせ、麻紐で絡げて結着する。特に両居木を使われている木材は柔らかくて軽く、加工しやすいミズキという木材を用いることとなった。

大和鞍は明治時代から大和鞍は西洋の鞍を入れ替え、鞍打ち師もいなくなったため、今調べる限り、鞍の作り方に関する歴史資料や文献をほとんど残されていない。歴史文献や史料に水干鞍の素地について詳細の作り方が見当たらないが、中世に流行した職人歌合¹⁰⁰では、高知市立図書館所蔵の「土佐国職人尽絵 一番 鞍細工」¹⁰¹ (図126)、室町時代 (1500年) に書かれた「七十一番職人歌合絵巻」¹⁰² の四十五番右の鞍細工絵 (図127)、江戸時代に東坊城和長、土佐光信の「職人尽歌合 3巻」¹⁰³ (図128) の中にとともに、鞍細工という職人の絵が描かれている。

「土佐国職人尽絵」の鞍細工絵を見ると、右上にある鞍は台のようなものに載せられている。この台のようなものは、「止戈枢要」に記載されている「鞍盤之図」

¹⁰⁰ 職人歌合：さまざまな職能民が左方・右方に分かれて和歌を詠むという形をとる仮託の歌合で、絵を伴う。中世のものに、13世紀から15世紀にかけて成立した《東北院歌合》5番本、同12番本をはじめ、《鶴岡放生会歌合》《三十二番歌合》《七十一番歌合》の4種5作品がある。出典：株式会社日立ソリューションズ・クリエイト (<https://kotobank.jp/word/職人歌合>)

¹⁰¹ 竹本義明、『校注 土佐国職人歌合』、1989年、37p

¹⁰² 『七十一番職人歌合』とは、中世の歌合。室町時代・1500年末ごろに成立したとされる中世後期最大の職人を題材とした職人歌合。職人の姿絵と「画中詞」と呼ばれる職人同士の会話や口上も描かれていることから『七十一番職人歌合絵巻』とも呼ばれる。出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 (2014/12/02 14:43 UTC 版)

¹⁰³ 東坊城和長 書(1460-1529)、土佐光信 画、(1434-1525)、『職人尽歌合 3巻』、唐本屋宇兵衛、全4冊、1744年、国立国会図書館 (写)

(図129) と似ていることを考えられる。鞍を組み合わせる際に、組んだままに「鞍盤」に載せられて、また、「七十一番職人歌合絵巻」と「職人尽歌合 3巻」の絵は、鞍細工職人は手を持った道具の形は「止戈枢要」の中の「手 鉦 大小全図」(図130)と「手鉦の柄図」(図131)と照合することにより、室町時代から「手鉦」は鞍細工の道具として用いられ、前輪・後輪の形を荒削りした後平らにすることがわかっている。残念ながら、もっと詳細な工程が判明できないけれど、鞍作りの一端を垣間見ることのできるだろう。

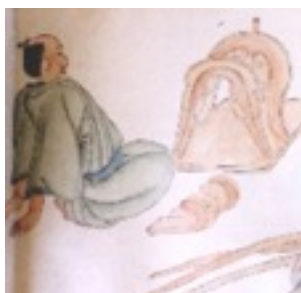


図126 校注 土佐国職人歌合 (1989年) (写真：高知県教育センター)



図127 七十一番職人歌合絵巻 (室町時代) (写真：立命館大学アート・リサーチセンター(ARC)古典籍ポータルデータベース)



図128 職人尽歌合 3巻 (江戸時代) (写真：国立国会図書館)

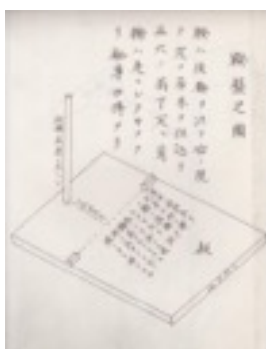


図129 鞍盤之図 (写真：「止戈枢要」)



図130 手鉦大小全図 (写真：「止戈枢要」)

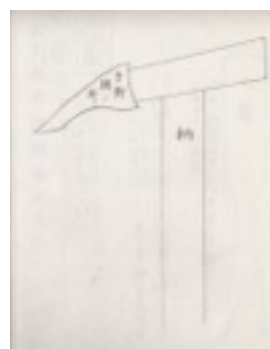


図131 手鉦の柄図 (写真：「止戈枢要」)

鞍の装飾は、本稿の「第3節 水干鞍の装飾について」に、「安土桃山時代という三十年間に豪壮・華麗を極めた文化が花開いたため、水干鞍の過飾技術も発達した。……また桃山時代から江戸時代にかけて、漆工芸における装飾の技術が大きく発達したことは明らかである。特に江戸時代に将軍や大名は漆工芸を推奨したため、当時の漆職人たちは漆技術は発達を見せ、高蒔絵、研出蒔絵、肉合研出蒔絵などの蒔絵技法が精巧無比の極致に達した。」と述べた。

鞍の装飾は時代の変遷、美意識の変化、使用目的の差異などにより、意匠も変わって来る。平安時代の素地鞍、鎌倉時代の螺鈿鞍、桃山時代の、蒔絵鞍や南蛮人鞍など様々な新しい意匠を見せられる。特に江戸時代に入ると、高蒔絵、研出蒔絵、肉合研出蒔絵などの蒔絵技法が最高峰の極致に達したため、珍しい意匠の鞍も多く

見られる。その江戸時代の鞍の中においては、馬の博物館所蔵「烏彫木漆塗鞍」の加飾は、前輪・後輪にそれぞれ一羽飛んでいる鳥の意匠表現が特徴的である。鳥のモチーフの意匠も特異の美意識を生み出してきた作品と考えられた。

日本神話において神武天皇の東征の際には、八咫鳥（3本足のカラス）が熊野国から大和国に入る道案内をしたという神話がある。だが、いつの間に鳥は忌み嫌われる鳥になるが、日本の伝統意匠の中、鳥文様ではめずらしい意匠であるが、古くより、熊野（現和歌山県）にある熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の3つの神社が八咫鳥は導きの神として信仰されている（熊野三山の信仰と呼ばれる）。

「牛王宝印^{ごおうほういん}」は、社寺から出す刷り物の守り札で、厄除けの護符である。特に熊野の「牛王宝印」が最も有名で、符札に多くの鳥の文様が描かれている（鳥文字と言われる）。熊野三山の熊野本宮大社（図132）、熊野那智大社（図133）、熊野速玉大社（図134）である各大社ごとに意匠は異なる。また、宗教だけではなく、武家である熊野の雑賀党鈴木氏では家紋として八咫鳥紋や鳥紋も使用されている。



図132 熊野本宮大社の牛王宝印

（写真：GOOUHONGUU.JPG
作成：2008年10月10日）



図133 熊野速玉大社の牛王宝印

（写真：GOOUNACHI.JPG
作成：2008年10月10日）



図134 熊野那智大社の牛王宝印

（写真：
KUMANOGOOUHU.JPG
作成：2008年10月9日）

江戸時代に入ると、平和な時代だったと言われている。鞍も実戦の目的ではなく、お寺、神社の奉納品や将軍や大名などの献上品に変わってくる。その「烏彫木漆塗鞍」では、八咫鳥の信仰のために作られたものか、武家である熊野の雑賀党鈴木氏の所有品であるか、また解明ができてない。今後も「烏彫木漆塗鞍」の歴史背景について、もっと研究を続けたいと考える。

大和鞍は、前輪・後輪と左右居木の4枚の木を組んでいって、今回素地を再現制作際に、二股木のケヤキを使用し前輪と後輪を先に成形し、両輪の形が完成した後に、ミズキの丸太を半分切り、左右居木の形を出し、前輪と後輪を少しずつ合わせながら、組み合わせた。その素地制作の過程で同時代の鞍をX線の撮影データに照合し、居木の存在については推測ができた。一般的に騎乗の際人は鞍に荷重をかけるので、馬は摩擦力や体重の衝撃力などを受ける。特に居木には、材質としてミズキやキリなどの柔らかい木材がよく用いられるため、断裂・割れが生じる場合が多くみられる。水干鞍の居木に破損が及んでいる場合、鞍全体を一旦解体して破損部材の補修や必要最低限度の取り替えを行い、元の部材を、元の位置に、同じ工法で再び組み立てる修理が必要となる。そもそも居木は交換できる消耗品という考え方が根底にある。

また、何度も掃除や解体修理を経ているため、本来の緒の結びの資料も僅少である。現在残っている鞍の作品の調査を通じて、江戸時代以降の武器・馬具に関する有職故実の研究文献に記載されている鞍の型紙、拓本、結び図などを検証して、鞍の素地制作、江戸時代の漆加飾技法、鞍の組立方法や結びの工程と手順を実験・実践し、理論的且つ実証的に鞍制作の伝統技法を解明した。本研究は水干鞍の伝統技法を考察し、その構成する各素材と製作技法の特徴を分析し、復元した鞍素地の制作の工程や鞍の結縛方法、及び螺鈿鞍の修復技術などを得た研究結果は水干鞍について文化財保存修復のための資料として検討されることを目的としている。

江戸時代の鞍は、時期や地域、用途によって多様な特徴がみられる。しかし実際に、従来の学説では、古墳時代の遺跡から出土した馬具の研究、正倉院所蔵の木製鞍や中世の鞍には夜光貝を用いた螺鈿鞍に対する論議が主流となっているが、近世鞍は、あまり注目されてなかったため情報や資料が乏しい。日本鞍に伝わった技術の一つとして水干鞍があることから、江戸時代に日本全国の鞍生産地と現存している水干鞍と共に日本鞍と江戸時代の歴史の関連性に関して論じられる部分であると考へ、今後水干鞍についての更なる研究が重ねられ、これが日本鞍に関する歴史の中で重要な位置を占めるとの認識において、さらなる理解も周知させた、次に続く研究に続けたいと願っている。

謝辞

本研究を遂行し学位論文をまとめるに当たり、多くのご支援とご指導を賜りました、指導教官である三田村有純先生に深く感謝しております。また、漆芸技法および修復技術にわたる多大なご支援、ご指導を賜りました小椋範彦先生、奥窪聖美先生に深く感謝いたしております。本研究を遂行するに当たり、日本の鞍について多くのご指導を賜りました鞍の研究者菅野茂雄先生には深く感謝しております。また、「烏彫木漆塗鞍」の観察考察を行うために所蔵先である馬の博物館において閲覧をいただきました。所蔵先である末崎真澄先生をはじめとした皆様のご配慮、ご協力に感謝申し上げます。「青貝入和鞍骨」の観察考察を行うために本学大学美術館において閲覧をいただきました。原田一敏先生をはじめとした皆様のご配慮、ご協力に感謝申し上げます。本論文作成に当たり、審査委員として多くのご助言を頂きました、井谷善恵先生、原田一敏先生、片山まび先生には深く感謝いたします。

附表

古代の鞍の3つ特徴		
前輪	後輪	居木
周縁に覆輪を施す	周縁に覆輪を施す	4枚居木 幅広い2枚居木
外側が平滑に仕上げられている	外側が平滑に仕上げられている	

軍陣鞍と水干鞍の比較		
名称	軍陣鞍	水干鞍
文献に現れた時代	江戸時代	平安時代
前輪	山の高は総高の三分の一	山の高は総高の四分の一
後輪	素地厚く、彎曲部分が深い	素地薄く、彎曲部分が浅い
居木	幅広い	幅狭い
手形	有	有
鰐口	深く大きい	浅く小さい

正倉院の鞍の木材材質（正倉院紀要第3号より）				
	居木	前輪	後輪	註記
馬鞍 第1号	カシ	散孔材	散孔材	
馬鞍 第2号	カシ	ムクノキ	ムクノキ	
馬鞍 第3号	カキ	カキ	カキ	クロカキ
馬鞍 第4号	カキ	カキ	カキ	クロカキ
馬鞍 第5号	カシ	ヤマグワ	ヤマグワ	前後輪の材は楸木に似（林）
馬鞍 第6号	カシ	ヤマグワ	ヤマグワ	
馬鞍 第7号	カシ	ムクノキ	ムクノキ	
馬鞍 第8号	カシ	ムクノキ	ムクノキ	
馬鞍 第9号	カシ	ムクノキ	ムクノキ	
馬鞍 第10号	カシ	ヤマグワ	ヤマグワ	

各種刻苧/木屎の差異						
用途	今回鞆の模作	乾漆仏像用			漆素地用	
名称	刻苧/木屎	抹香漆	木屎漆	木屎漆	刻苧/木屎	
時代		奈良時代		平安時代以降		
特徴		成形し易い				
漆	生漆 (生正味)	生漆 (瀬杓漆)	生漆 (瀬杓漆)	生漆 (瀬杓漆)	生漆 (瀬杓漆)	生漆 (瀬杓漆)
粘着剤	そくい (ご飯粒) 小麦粉	小麦粉	小麦粉	小麦粉	そくい (ご飯粒)	米糊
植物粉 と繊維	木の素材 ケヤキの木粉 ミズキの木粉	抹香粉 (檜の葉と 皮を乾かして 粉末)	ニレの 樹皮	木粉	木粉 麻の繊維	木粉 麻の繊維

烏文様の高上げ工程の比較					
	今回鞆の模作	日本漆工の研究		無形文化財記録 工芸技術編4 蒔絵	
名称	高上げ技法	黒蒔絵	錆上げ蒔絵	黒蒔絵	錆高蒔絵
工 程	金貝着せ	置目	置目	置目	置目
	置目	蠟色漆で盛り上げ	下蒔き	炭粉下蒔き	炭粉下蒔き
	金貝切抜き	描割り	錆描き	炭粉研ぎ	錆付け (3回)
	錆付け	毛打ち	錆付け	摺漆固め	錆研ぎ
	錆描き	—	錆研ぎ	蠟色漆で描き塗り	炭粉上げ
	錆付け (数回)	—	肌塗り	研ぎ上げ	漆固め
	錆彫り	—	肌塗り研ぎ	蠟色仕上げ	研ぎ上げ
	漆固め	—	その他の工程は高蒔絵と同一なれば省略する	—	摺漆固め
	錆研ぎ	—		—	仕上げまで高蒔絵の手法と同様
	研ぎ上げ	—		—	
	上塗り	—		—	
	塗り研ぎ	—		—	
	蠟色仕上げ	—		—	
	漆描き	—		—	

<参考文献>

英語翻訳版：

- ボルジギン・N・オルトナスト、『モンゴルの遊牧畜牧文化における馬具の儀礼的地位相—馬具に関するユールを事例に—』、千葉大学社会文化科学研究 8、p219-p231、2004年
- J.クラットン=ブロック、『馬と人の文化史』、桜井清彦・清水雄次郎訳、東京、東洋書林、285p、1997年

日本語：

- あかね会、『平安朝服飾百科辞典』、講談社、1975年、p476
- 大沼宜規、『今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から故実家栗原信充の研究資料(武器・馬具)—『古今要覧稿』の材料を中心に』、国立国会図書館月報 (572)、東京：国立国会図書館、p2-p3、2008年
- 岡安光彦、『いわゆる素環の轡について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年』、日本古代文化研究 第2号、1985年
- 諫早直人、『海を渡った騎馬文化—馬具からみた古代東北アジア』、東京、風響社、66p、201年
- 鍵谷徳三郎、『尾張熱田高倉貝塚實査』、東京人類學會雑誌 23(266)、p275-p283、1908年
- 勝部明生、『藤ノ木古墳鞍金具文様の考察—亀甲繫ぎ文(藤ノ木古墳出土刀剣の復元研究)』、研究紀要 / 由良大和古代文化研究協会、橿原：由良大和古代文化研究協会、p50-p58、1989年
- 勝部明生、鈴木勉、『古代の技—藤ノ木古墳の馬具は語る』、東京、吉川弘文館、286p、1998年
- 神谷正宏、『大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復元』、考古学雑誌 72(3)、p379-p392、1987年
- 菅野茂雄、『御嶽神社蔵 国宝円文螺鈿鞍付属、厚総三懸の調査報告』、甲冑武具研究 (189)、東京：日本甲冑武具研究保存会、p5-p9、2015年
- 菅谷文則、川崎志乃、東影悠[他]、『三重県津市高茶屋大塚古墳出土馬具の研究』、考古学論攷：橿原考古学研究所紀要 36、p55-p75、2013年
- 木内武男、『木工の鑑賞基礎知識』、至文堂、261p、1996年
- 『近世ヨーロッパの皮革 5.革工芸品』、皮革科学：hikaku kagaku 59(1)、p9-p21、日本皮革技術協会、2013年
- 儀賀美智子、『古くから伝わる日本の作法』、鈴鹿国際大学紀要]、p 135- p 145、鈴鹿国際大学、2012年
- 小島摩文、『馬具の種類と名称について—データベース化のための標準名を考える—』、神奈川大学 国際常民文化研究機構年報 第5号、p57-p81、2015年、p60
- 小松大秀、『菊螺鈿鞍について』、東京国立博物館研究誌 (345)、東京：東京国立博物館、p18-p27、1979年

- 小松大秀、『日本の鞍その形態と美術史的側面について』、東京国立博物館紀要、第19号、p81-168、図p5-80、1984年
- 小松大秀、『中世螺鈿鞍の美 (特集 馬とはどのような生き物か?: 馬と人の出会いから未来へ)』、生き物文化誌: 人と自然の新しい物語、p21 p48-p55、東京: 生き物文化誌学会、2014年
- 坂本美夫、『34 馬具』、東京、ニュー・サイエンス社、109p、1985年
- 笹間良彦、『日本の合戦武具事典』、東京、柏書房、390p、1999年
- 沢口悟一、『日本漆工の研究』、美術出版社、389p、1966年
- 沢田正昭、『考古藤ノ木古墳金銅製馬具(奈良)』、仏教芸術 / 仏教芸術学会 編、東京: 毎日新聞社、p4-p5 p52-p61、1991年
- 「下田東遺跡発掘調査概報Ⅱ-平成15・16年度-」、奈良県、香芝市・香芝市教育委員会、66p、2006年
- 末崎真澄、『馬の博物誌』、東京、河出書房新社、115p、2001年
- 鈴木勉、『斑鳩・藤ノ木古墳出土鞍金具の金工技術と技術移転』、考古學論攷: 橿原考古学研究所紀要、橿原: 奈良県立橿原考古学研究所、p1-p33、1997年
- 関根正直 述、『禁秘抄講義下巻68内裏焼亡』、六合館、1927年、p42
- 武部敏夫、『歴史手帖 新井白石と正倉院の馬鞍』、日本歴史 (617)、東京: 吉川弘文館、p34-p36、1999年
- 貴島恒夫、嶋倉巳三郎、林昭三、『正倉院宝物の木材材質調査報告』、正倉院紀要 第3号、正倉院事務所、1981年、p5
- 竹内奈美子、『葦穂蒔繪鞍鐙』、國華 116(1)、東京: 國華社、p30-p34、2010年
- 竹之内一昭、『中世アジアの皮革 3.日本』、皮革科学57(3)、日本皮革技術協会、p91-p103、2011年
- 出口祐資 (吉村亨ゼミ)、『藤ノ木古墳の金銅製鞍金具に関する一考察』、人間文化学部学生論文集 第8号、京都学園大学人間文化学会、2010年
- NPO工芸文化研究所、『いわき市中田横穴出土馬具の復元製作の概要』、福島県文化財センター白河館研究紀要、p61-p72、2012年
- 永瀬康博、『正倉院の鞍褥と熏』、御影史学論集 (32)、p63-p78、神戸: 御影史学研究会、2007年
- 中里壽克、『鹿島神宮蔵黒漆居木の修復処置』 (受託研究報告第35号)、保存科学第14号、東京文化財研究所: 保存修復科学センター、p77-86、1974年
- 成島家 (司直・良讓・柳北の三代) 編纂、経済雑誌社 校、『徳川実紀-嚴有院殿御實紀卷 廿三』、経済雑誌社、1904年、p412
- 西川明彦、『武器・武具 (日本のこころ(143)正倉院の世界) -- (正倉院宝物の魅力)』、別冊太陽(143)、東京: 平凡社、p130-p133、2006年
- 西川明彦、『日本の美術 No.523 正倉院の武器・武具・馬具』、東京、至文堂、96p、2009年
- 日本馬具大鑑編集委員会、『日本馬具大鑑第4巻近世』、日本中央競馬会、東京、183p、1991年
- 塙保己一、『群書類従 251 装束部 117 布衣記』、続群書類従完成会、1960年

- 林田重幸 [他]、「出水貝塚の馬について」、鹿兒島大學農學部學術報告 4、p70-p77、1955年
- 林俊雄、『鞍と鐙—創価大学人文論集 第08号』、創価大学人文学会、1996年
- 林復齋（江戸時代）、『通航一覽 第4冊』（卷一五五）、全8冊、国書刊行会、1913年
- 「ますます面白くなった斑鳩の里--藤ノ木古墳出土の鞍金具をめぐって(アート・ニュース)」、東京：新潮社 37(3)、p78-p82、1986年
- 宮代栄一、『古墳時代における馬具の暦年代--埼玉稲荷山古墳出土例を中心に』、九州考古学 (71)、p1-p33、1996年
- 文化庁、『無形文化財記録 工芸技術編 蒔絵』、美術出版社、389p、1966年
- 「八尾市文化財調査研究会報告47」、大阪府、財団法人八尾市文化財調査研究会、130p、1995年
- 渡辺素舟、『日本服飾美術史』、雄山閣、1973年、p196-p197

中国語：

- 張濤、『秦始皇兵馬俑』、芸術家出版社、台北、1999年、p70-p71
- 洪波浪、『臺南縣志：卷十附録』、臺南縣政府、1980年、p150
- 江日昇、『台湾外記-10卷』、文叢60、臺北：臺灣銀行經濟研究室、1995年
- 郁永河(清)、『裨海紀遊卷 卷上』、方豪合校本、臺北：臺灣銀行經濟研究室、1959年
- 王克林、『骑马民族文化渊源初探—兼论与日本古坟时代文化的关系』、《文物世界》(太原)3期、p15-p27、2001年
- 刘永華、『中國古代車輿馬具』、清華大学出版社、p305、2013年、p266~268

< 図録 >

- 東京国立博物館、『日本の武器武具：特別展図録』、特別展—日本の武具武器の図録、大塚工芸社、p364、1977年
- 馬事文化財団、『馬の博物館所蔵品選集』増補版、横浜市、馬事文化財団、147p、2001年
- 馬事文化財団、馬の博物館、『馬と人を結ぶもの 鞍の世界』、横浜市、馬事文化財団、59p、2004年

< 史料 >

- 一条兼良（1402-1481）、『桃華蘂葉』、有職故実書、室町時代後期（1480年）
- 稲葉通邦、「鞍木鐙類聚」、国立国会図書館、1744年
- 大沢繁豊（江戸時代）、『鞍鐙目利書(元禄四梅津伝右衛門へ伝授奥書)』、1冊、国立国会図書館写、2011年
- 大関増業、「止戈枢要—續録34」、1822年

- 『大坪本流馬道秘書(4)大坪本流鞍寸之卷』、江戸後期、国立国会図書館写、2011年
- 『神作鞍鐙傳』、作者不明、明暦元(1655)年
- 狩谷椽斎(1775-1835)、『箋注倭名類聚抄第5卷76 鞍馬具』、曙社出版部、1931年
- 栗原信充、「鞍鐙新書」、冑山文庫、1794年
- 古事記 上卷 天照大神と須佐之男命 天の岩戸 712年(和銅5年)
- 三条西実隆、『西三條裝束鈔』、有職故実書、写、室町時代中期(15世紀後半)
- 『続日本紀』、桓武天皇の命により平安時代初期に菅野真道らが編纂された勅撰史書。
- 徳川光圀 編、徳川綱 校、徳川治保 重校、『大日本史 礼楽志8-9』、全15巻、吉川弘文館、1911年
- 中島正蔵(江戸時代)、『鞍作者判鑑』、1冊、写、国会図書館：古典籍資料室所蔵
- 日本書紀 卷第一 神代上 第七段 720年(養老4年)
- 藤原緒嗣ら、『日本後記』、史書、全40巻(現存10巻)、承和7年(840年)
- 松平定信(1758-1829)、「集古十種 馬具之部」、大御学都可佐文庫、全85巻、1800年
- 屋代弘賢(1758-1841)、『古今要覧稿第2冊』、国書刊行会、全6巻、1907年